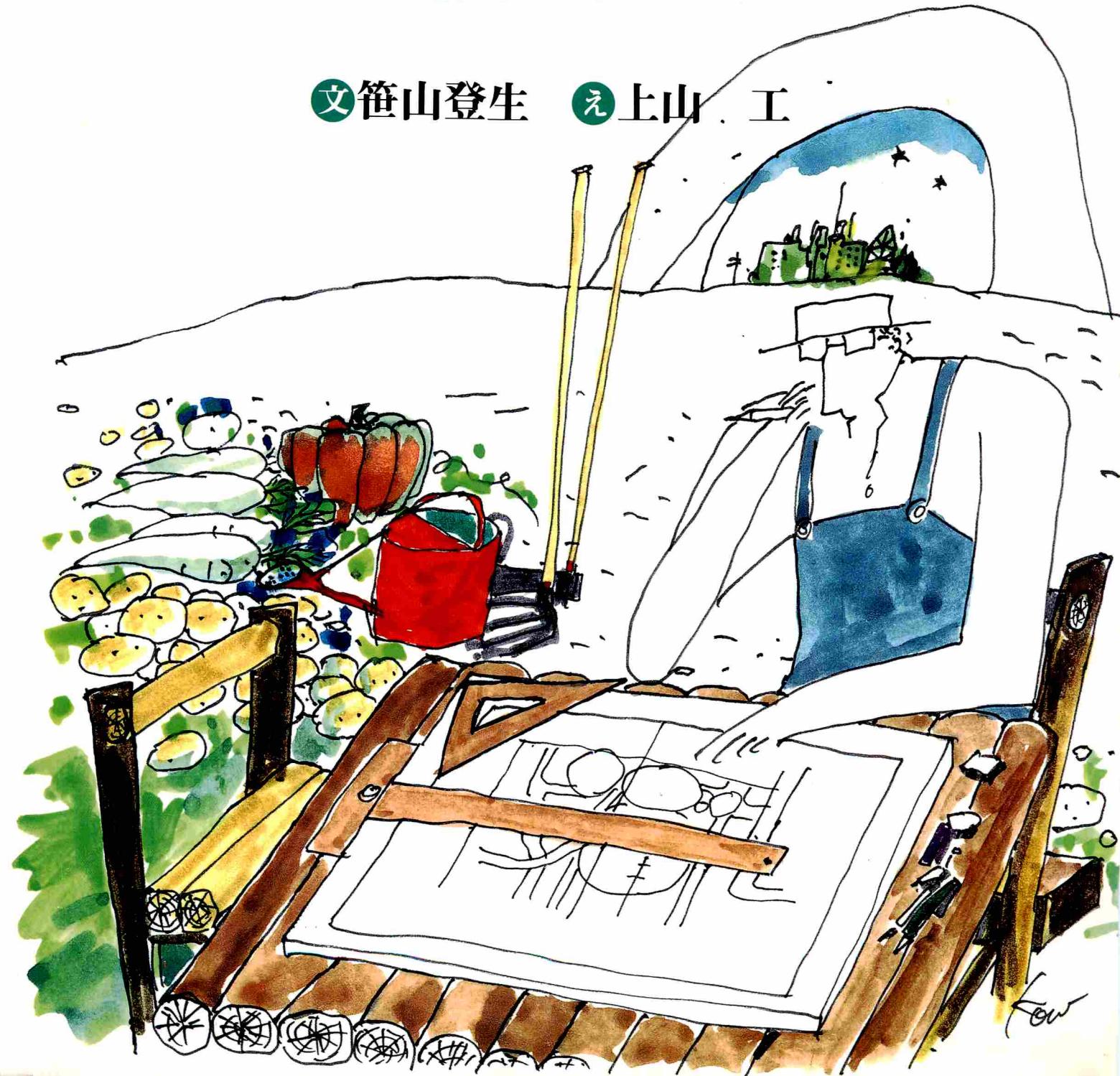


秋田の絵本

かまくらとぴあ

雪国の未来

文 笹山登生 え 上山 工

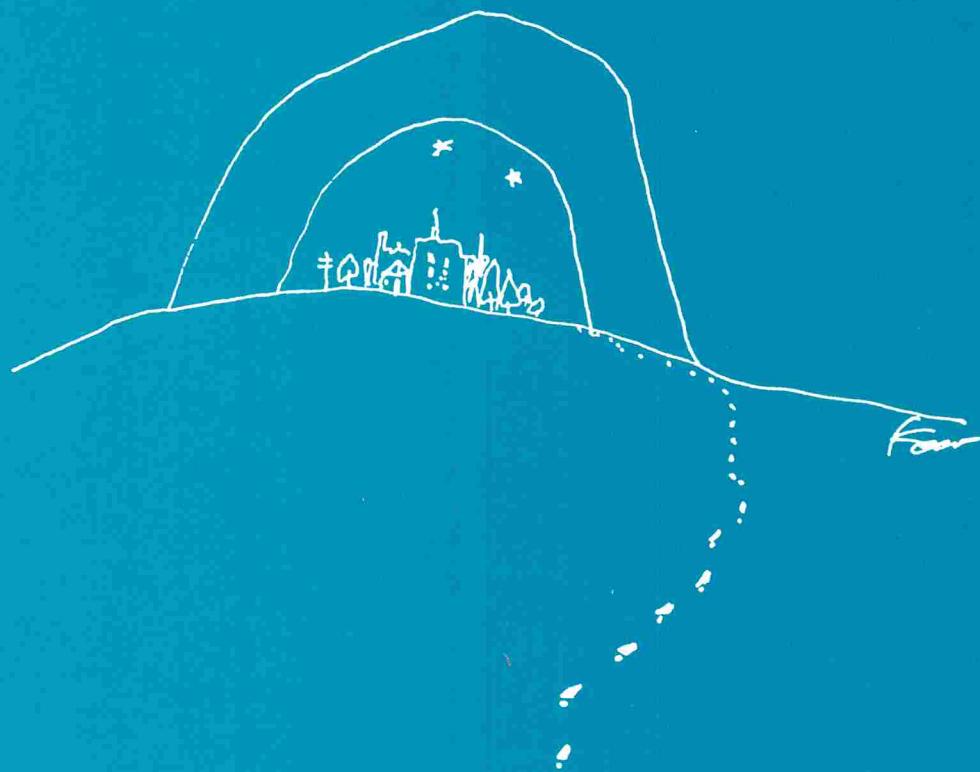


秋田の絵本

かまくらとぴあ

雪国の未来

文 笹山登生　え 上山　工



○日本地域社会研究所

はじめに・「かまくらとぴあ」は日本のふるさこと

私たちのふるさと横手には、有名な“かまくら”的行事があります。雪の洞をつくり、水神様を祭つて、子どもたちが餅やみかんを持ち寄つて遊ぶ“かまくら”は、秋田県横手市の名高い風物詩となつています。こんこんと降りつづく雪のなかを、子どもたちが“かまくら”に集まつてくるシーンは、まるでメルヘンの世界といつてよいでしょう。雪の降らない地方では味わうことのできない、自然と人間が一体化したヒューマンな行事です。雪という風土があつてはじめてつくり上げることのできるユートピア、そして同時に自然と強烈にかかわりあいながらも、同じ屋根の下で、それぞれの世代がたくみな機能分担のもとに、それぞれの存在価値をみとめあう、そんなユートピアでもあるはずです。高度成長の波に洗われ、忘れてしまつたふるさとのあり方、家族のあり方の原形と、明日への発展を解くカギが、ここにあります。それを私たちは、「かまくらとぴあ」と呼びたいと思います。

二一世紀は、東北の時代です。二〇世紀の後半には、いろいろな開発が進みます。新幹線、秋田空港、高速道路の整備が着々となされ、それにしたがつて企業が北上しつつあるのをみても、それがいえます。この勢いは止まらないでしょうし、新しいユートピアをめざして全国の視線がわが東北に集中することはまちがいないことです。

かつて、高度成長時代の末期に「アニマルから人間へ」という早稻

田大学の研究グループの提言があり、そのなかで“北上遷都論”ということがいわれ、一時、大きな東北ブームが起きたことをご記憶の方もあるでしょう。それがオイルショックの後にいざこともなく消え、そのことで東北人のなかにひとつの挫折感が生まれたのは事実です。だが、いまふたたび、東北が日本の新時代の夜明けづくりの先頭に立たなければならぬ時が、ほんとうの意味でやってきたのです。

そのためには、私たちは三つの視点を持たなければならぬと思します。視点を変えることで視野が変わるし、視野が変わればそれまでみえなかつたものやことがらがはつきりみえてきます。ひとつは、「鳥の目」。そして、「アリの目」。さらには、「魚の目」です。鳥のように上空を舞いながら地上を見る。すると、今までみえていなかつたものが感動とともにみつけだせます。しかし、上空からだけではみつけだせなかつたものもあります。大地を這いながらごく至近距離の物象をあざやかに発見していく、それが「アリの目」の視点です。最後の「魚の目」とは、なんでしょう。水というフィルターをとおして見る「魚の目」とは、時代の流れ、状況、情報の量と質のフィルターといえます。

この三つの視点を身につけ、東北の近未来像を描いてみましょう。いま、東北を“南東北”“北東北”“東東北”“西東北”に細分化するど、そこに多様な地域格差が広がつてくることがわかります。産業も、教育も、文化も、福祉も、東西南北のそれぞれの地域特性でもつ

て細分化し、それぞれの地域の可能性を考える必要があるでしょう。つまり、もつと科学的に、東北の持つてている豊かさを分析し、照射し、活性化のプログラムを創りだすことです。そしてなによりも、その活性化の大前提として、わがふるさとを愛することが大切です。産業の発展も、教育の充実も、ふるさとの人と風土を心深く尊び、愛し、それを次代に語り伝えていく精神があつてはじめてできるものです。それは、なにも閉鎖的な郷土愛をいうのではありません。ふるさとを愛することをつらぬくことが民族愛になり、そしてそれは、きらめくインター・ナショナル、地球への愛となつて二一世紀を彩ることになるでしょう。

笹山登生

はじめに…「かまくらとぴあ」は日本のふるさと……………3

第一章 新しいふるさとづくり……………8

東北の時代へ、GO！ GO！／三世代同居のしあわせ像
—「かまくらとぴあ」／表日本と裏日本を逆発想すれば／
素人の発想で雪のメリットを見直そう／人が動けば情報・
物・金が動く／雪国はシンクタンクにとつて最適地／東北
にコンベンション・シティをつくろう／一村一品運動にマ
ーケティング感覚を／秋田杉で“家具調コンピューター”は
いかが／地域づくりであなたもタレントに／登竜塾で勉強
していること

第二章 出でよ、新農業！……………19

偏差値農業からQC農業へ／既成の農業に衝撃を与えるひ
とつの試み／一八〇度発想を変えると、新農業がみえる／
新農業エリートがほしい／新しい感性の農業博覧会をやり
たい

第三章 人を呼ぶ観光……………24

嫁さん集めが観光の原点／泊まらぬなら泊めてみせよう観
光客／夜の観光は屋台の風物詩からはじまる／秋田雪見八
景はいかが／まごころというより「農魂」で観光にせまる

第四章 雪と地域おこし

29

一夜漬けでは雪問題は解けない／生活が屋根型を変え、雪処理を変えた／雪おろしを複雑にする都市化／雪おろしの経済学・不経済学／克雪都市づくりは住民が担い手／子どもたち優先の雪国づくりを

第五章 地域の福祉・家庭の福祉

35

女性にしわよせがくる福祉ではいけません／介護する人は自由を、介護される人には尊厳を／車椅子と同じ高さで目があわせれば／まわりくどそうなやり方がほんとうは大切です／幼い時の福祉体験が明日の福祉をつくる

第六章 新しい時代の教育

40

創造教育を考える／教育の原点は“手先教育”にあり／おばあちゃん子には登校拒否児童が多い／“えづけ”と“しつけ”と“運動”／少年よ、大志を抱け！

第七章 これからの中土・地域づくり

45

國土づくりに新しい視点を／土地開発の新ソフト／地域のアイデンティティをつくろう

そして…「かまくらとぴあ」づくりがはじまる

48

「かまくらとぴあ」づくりのアイデア玉手箱

—— 笹山登生・雪国活性化のデザイン

49

第一章 新しいふるさとづくり

東北の時代へ、GO！ GO！

東北のことをただ“東北”という二文字で考える時代は過ぎました。

南東北、北東北、東東北、西東北と細分化し、それぞれの地域特性を新しい時代の感性や社会ニーズに照らしあわせてみたら、どうでしょう。

まぶしいばかりの魅力にあふれています。

そこには、東北新幹線、秋田空港などの整備が呼び起こした東北の新しいエネルギー、企業進出、観光開発などに向けた熱い視線がそぞがれています。

“日本のふるさと”を代名詞としている晴れ舞台が、ここにあります。

東北の時代へ、GO！ GO！



三世代同居のしあわせ像——「かまくらとぴあ」

「新しいふるさとづくり」「いきいきとしたふるさとづくり」は、ひとときとさえ、頭から離れたことのない私たちのテーマです。

雪国、雪国という暗いイメージを背負わされながらも、それでも必ずしあわせなふるさとが創造できる、と信じて疑うことのない私たち東北人。「雪こそぬくもり、やがてくる春のキュー・ピッド」——という小学生の作文の、なんと大らかなこと。新しい感動が湧いてきます。

おじいちゃん、おばあちゃん、息子さん夫婦、子どもたちがひとつ屋根の下でしあわせな暮らしができる三世代同居の家庭像こそ、東北の人びとすべての願いでしょう。そのために、安心して働ける職場、安定した農業経営、健康的な郷土づくりが必要です。

つくりましょう。「かまくらとぴあ」。



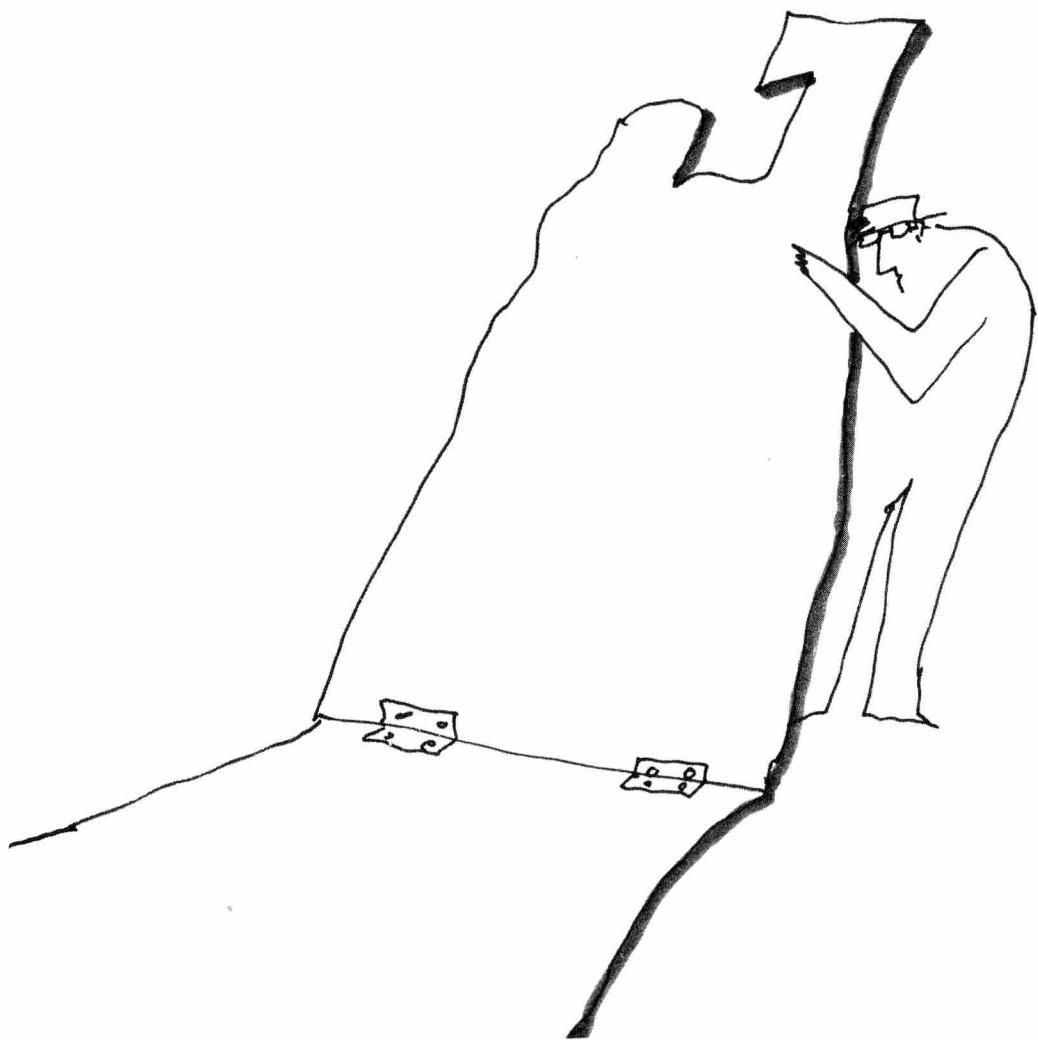
表日本と裏日本を逆発想すれば

山形、秋田は、裏日本といわれていますが、永い日本の歴史の中では、その文化圏においては常に表日本であり、中心的役割をになつてきました。

表だ、裏だという考え方は、後ろ向きの発想かもしれません。逆発想でみつめ直せば、この空白地帯の秋田、山形には、無限の可能性があることを発見できます。

二一世紀は、文化の時代です。ここに根ざした文化の香りが日本中に漂う時代がきたのです。

「日本海大歴史文化博覧会」のような、一大イベントを起こす時がきたのです。



素人の発想で雪のメリットを見直そう

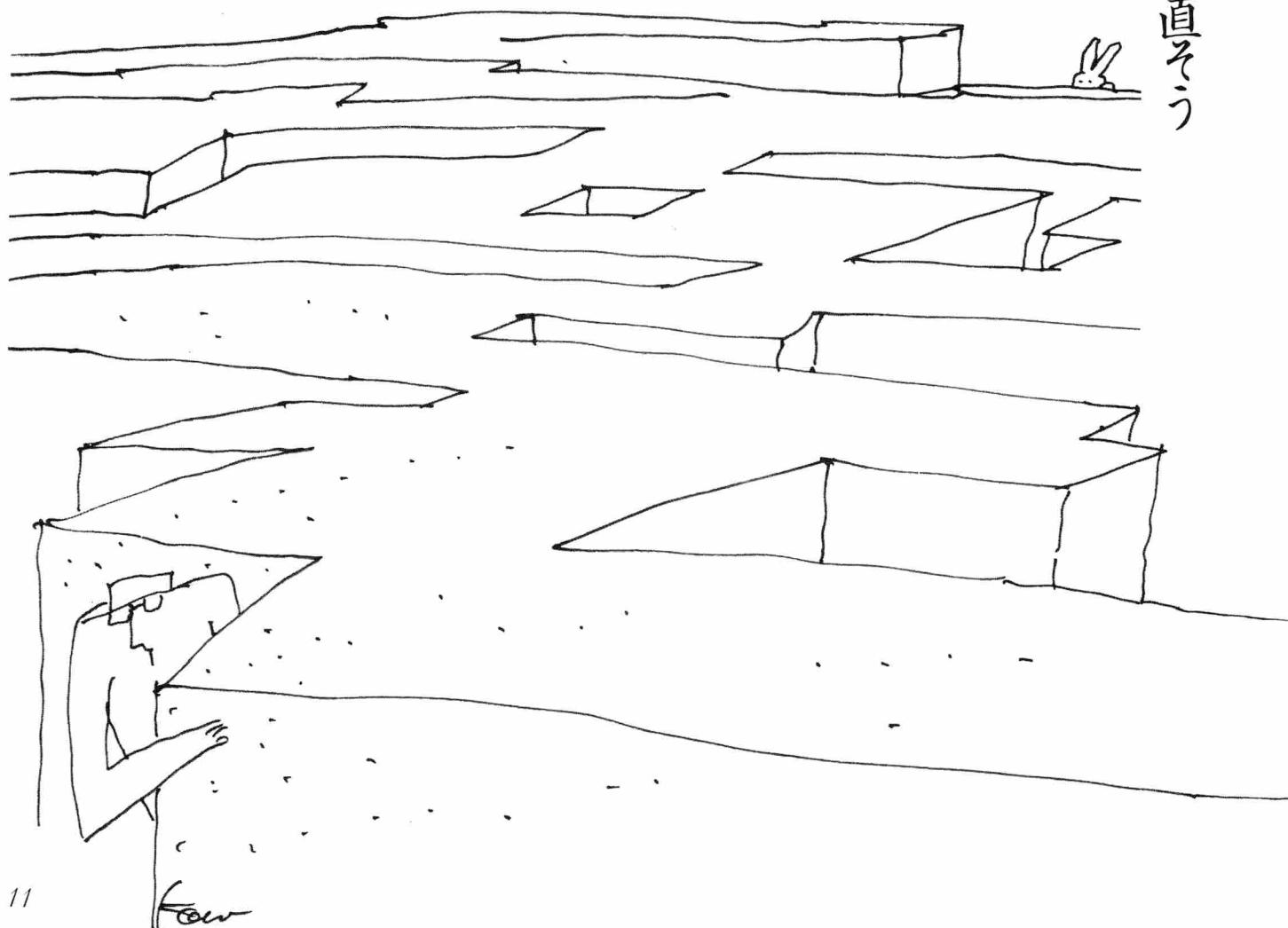
過疎であることを逆発想すれば、スペースが無限にあるというメリットとなります。

雪の問題は、どうでしょうか。

なかなか解けないパズル的な要素もあるけれど、逆にいえば、素人の発想が大事なのです。

雪の大迷路運動会、雪の白さを利用して着色した「カラフル雪まつり」、「かまくらとぴあ」体験ツアー、雪と温泉の宅配便などのアイデアは、どうでしょう。

都市づくりにしても、同じです。『雪がふればふるほど美しくみえるまちづくり』をめざしてみるのも、ひとつ考え方です。



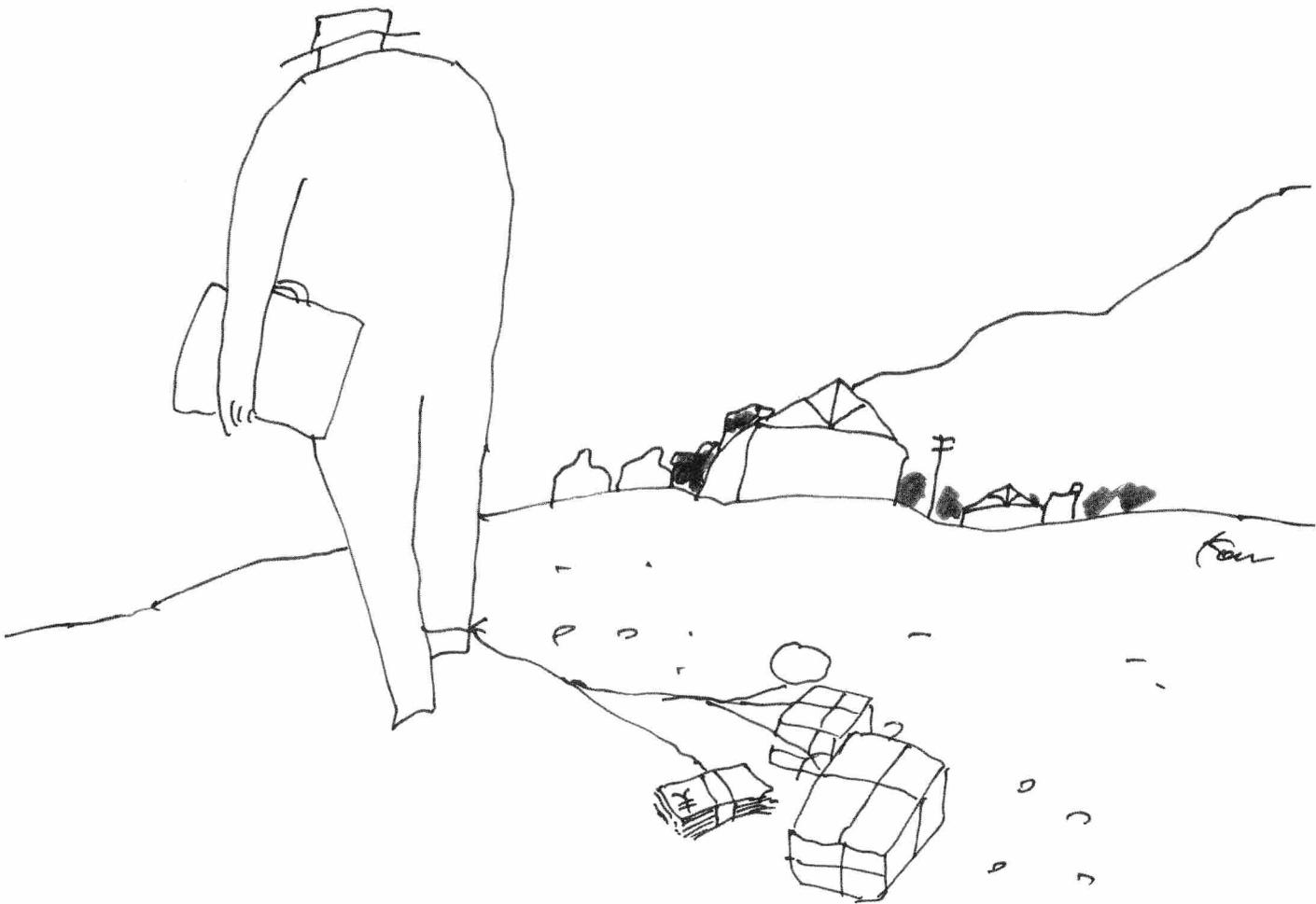
人が動けば情報・物・金が動く

奥羽山脈が地域の発展を阻害してきたとはいえ、いまや情報化・国際化の時代で、距離はどんどんせばまっています。

さらに東北管内の時間距離を短縮するには、コミュニケーション（小型機による短距離航空）の整備が緊急課題でしょう。地域発展の機動力をつけるには、人の交流が先決です。人が動けば情報が動くし、情報が動けば物が動き、物が動けば金が動きます。

動かすための交通ネットワークづくりと人のこころをとらえる受け皿づくりをいかにすべきか。

これから東北、白地図東北に“しあわせシーン”をデザインしてみましょう。



雪国はシンクタンクにとつて最適地

雪は、産業の方向からとらえると、クリーンな特性があり、これは超LSI（超大規模集積回路）やIC（集積回路）にとつて非常に重要なです。これらの先端技術は一〇〇万分の一、何千万分の一単位のゴミが問題ですから、雪国はとても価値ある環境なのです。しかも、雪は自然の吸音装置、消音装置として、雑音を消してくれるメリットもあり、創造・研究を中心としたシンクタンク（頭脳団）にとつて最高の環境といえるでしょう。実際に、企業の研究所や企画室がどんどん雪国に進出しています。

おまけに、雪国の人びとは非常に忍耐強い性格を持つていますから、研究開発型産業に向いています。通信回線を使った情報網を確立すれば、二一世紀をリードするソフト会社はどこへでも立地できます。まさに雪国は、その最適地といえるでしょう。



東北にコンベンション・センターをつくろう

いま、東北にとって必要なのは、開かれた地域交流、国際交流の場づくりです。

とくに東北は、日本の新しいふるさことして、いろいろな博覧会や会議、集会などを展開するのに最適な条件を持つています。

その意味で、東北にコンベンション・センター（国際会議や見本市、各種イベントなどにより集客力をつけながら、新しい産業を起こし、自立的発展をめざす二一世紀都市）をつくろうという発想は的を得ています。

今までの開発はどちらかといえば鉄道や橋や道路ができればいいというハード中心でしたのが、これからはソフト開発というべき、コンベンション主体の地域づくりが大切だと思います。国際会議や見本市などを誘致して、開かれた地域交流、国際交流の場をつくっていく発想を育て上げていかなければなりません。



一村一品運動にマーケティング感覚を

いま、日本中、一村一品運動ばやりです。

それがあらぬか、ふたをあけたら同じ顔。どこへ行つてもワイン、焼酎、しいたけ、つけるもの……。いくら“ふるさと時代”でも、これでは都会人にあきられてしまいます。

ちゃんとした流通経路に乗せるためには、そのネーミング、パッケージなど消費者ニーズにあつたマーケティング（市場性）的視点を持たねばなりません。

生産者サイドの目くばりでなく、市場サイド、消費者サイドに立つてみつめ直し、これぞ本物、こうあるべきだ、という教育普及の思想を持つた“地印良品”“人印良品”的一村一品運動を起こしていくべきでしょう。



秋田杉で“家具調コンピュータ”はいかが

天下に聞こえた日本の銘木・秋田杉を時代の感性でみつめてみましょう。

時代は変わりました。“温故知新”（古きをたずねて新しさを知る）から“翻故為新”（古きをひるがえして新しさをなす）の時代です。伝統的な木材産業と先端技術を結びつけた家具調こたつならぬ家具調コンピューターはどうでしょう。木のぬくもりのハイタッチと、テクノポリスをつかさどるエレクトロニクスのハイテックとの、ハイブリッド（交配）です。

明日を創造するキーワードは、この異業種、異能人の交流から、新しい産業を生みだすことです。



地域づくりであなたもタレントに

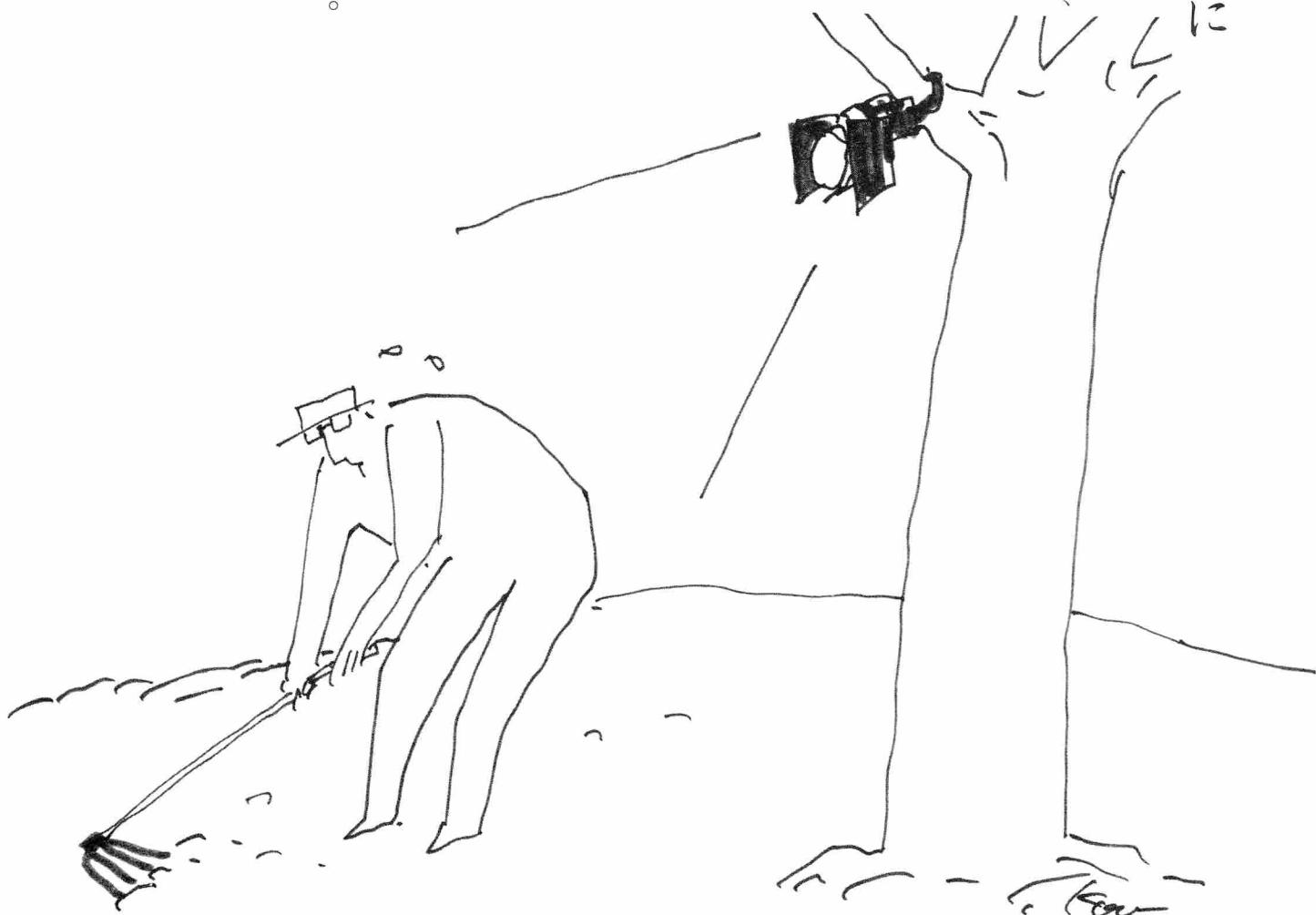
一〇〇人一〇〇色の多様化社会です。個性と活力とうるおいのある地域づくりを求めて、都会と農村の交流を活発にし、南北の経済・文化交流を深めなければなりません。

人が集まるところに活気あり、活気あるところに知恵があります。

二一世紀になるのは、いまの若者たちです。さあ、あなたの体験や知恵を生かす「時」がきました。

「ふるさとはありがたきかな」——そう思うでしょう。自然のほほえみ、あたたかい人びとの心にふれにおいて。いまの農村社会はいい仕込みができる透明な状況にあります。

さあ、いいまちをつくろう。帰つておいで。あなたがまちづくりの主役、魅力ある地域づくりのタレントです。



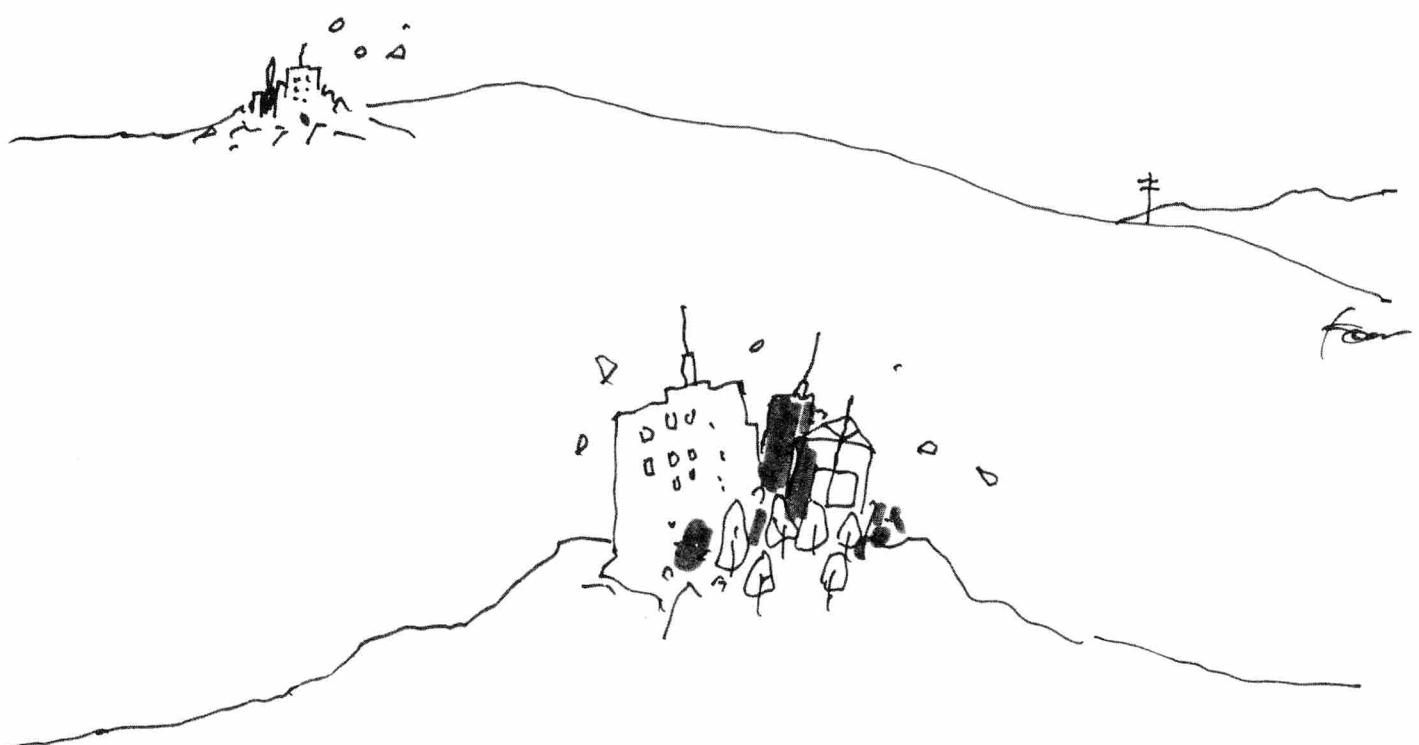
登竜塾で勉強していること

私たちは地元で、「登竜塾」というミニセミナーをつくり、若い中堅層の人たちを中心にして、勉強会を重ねています。

登竜塾は、雪の問題や女性の生きがい、農業問題、地域おこしなど、その地域地域のかかれている状況をとらえながらの、熱っぽい夢のある勉強会です。

そこで私たちが常に口にしていることは、「地元にやる気がなければ、地域おこしはできない」ということです。

地域おこしの“おこし”ということばは、沖縄では“自立”ということを意味しているそうです。これから大事なのは、国まかせ・行政まかせではなく、地域住民がみずから、わがまちをよくしよう、という考え方です。



第二章 出でよ、新農業！

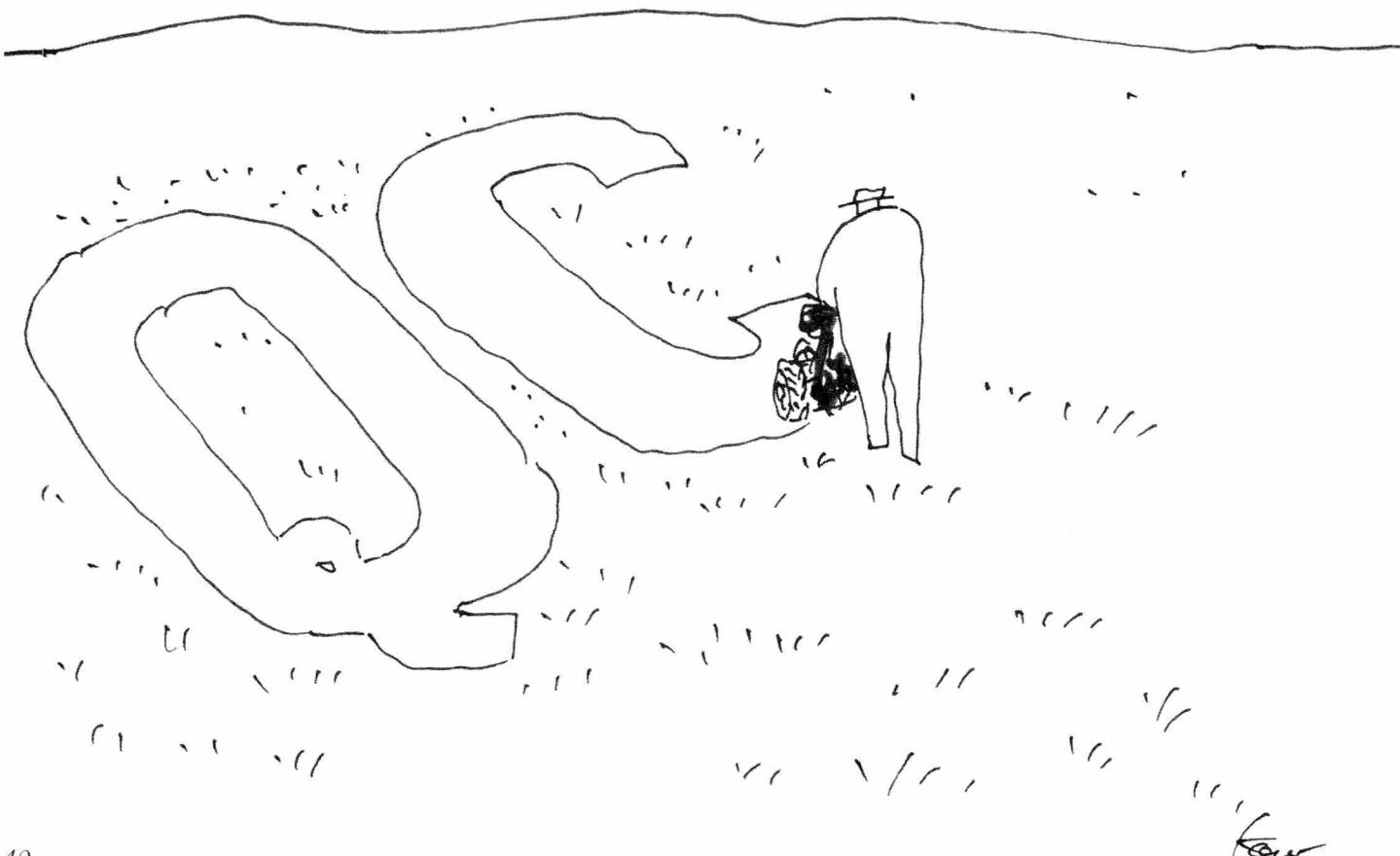
偏差値農業からQC農業へ

これまでの農業は、偏差値農業だつたといえます。農協の指導体制も、偏差値のいちばん大きいところにあわせた機械化や技術指導をしてきました。

それに対して、私たちはQC農業（品質管理農業）を考えていました。そのためには、次のことを学ぶ必要があります。

ひとつは、マーケティング（市場）の知識。もうひとつは、品質管理なり生産管理の手法。三つめは、コストダウンをいかにはかるかの知恵。四つめは、補助に頼らず融資によつていかに新農業を開拓するか。それが、QC農業です。

トヨタ・カンバン方式という世界に誇る自動車の生産管理方式がありますが、農業にも工業の生産管理の知恵を生かした手法をとり入れていく必要があるのでないでしょうか。



既成の農業に衝撃を与えるひとつの試み

私たちは、浜松の永田照喜治さんの「緑健農法」に注目しています。永田さんは、既成の農業にない発想で、良質の農産物をつくるために、沖縄から北海道まで、健康な野菜・果物の生産・供給・販売のネットワークづくりをしています。

西友フーズやダイエーなどと直結して、高品質をうたい文句にできる良質の農産物をつくっているのが、「緑健農法」の強味です。たとえば、完熟物（トマト、みかんなど数十種）などは直接、高級レストラン、料亭などでひっぱりだこで、生産が追いつかないほどです。

とてもユニークなのは、この農法を支援している人たちが、農業・食品関係者ばかりではなく、文化人や広告、銀行、企業などの人たちまでも共鳴し、異業種交流をやって研鑽していることでしょう。



一八〇度発想を変えると、新農業がみえる

農業には、適期というものがあります。

むかしの農民は、その適期をみずから気象や土壤の状況、過去の体験などを生かして決めていました。最近は、いささか異なり、農協の農事カレンダーにそつて、播種をし、防除をし、施肥をし、収穫し、販売しています。だから、適期がパターン化し、農作業のピーグが一時期に集中してしまい、その処理のために、機械や施設などへの膨大な投資がされています。

いまこそ、時間差生産、時間差出荷などによる農家の労働力平準化、市場価格のコントロール化などが不可欠になりました。さらに、転作時代が成熟期を迎える、農業にも工業化社会にあるような多品種少量生産の波が押し寄せています。一八〇度の発想転換の向こうに、新しい農業がみえてきます。



新農業エリートがほしい

農業界には、生産のプロはいても、マーケティングのプロや生産管理のプロが少ない、といわれています。

いかに上手に農産物をつくるかという技術的な面でのエリートが、優秀な農業者として位置づけられていますが、これから時代は、企業のように、生産、販売、経営、イメージづくりの分野に精通したマルチ型の新農業エリートを育成していく必要があります。

地元の農産物や加工品を高い鳥の目の視点でみつめ、全国的に通用するかどうかを見極める人や、さらに消費者ニーズをさぐつたり、売れるようにイメージづくりをして、"すき間商品"的な地場産品にしていく新農業エリートが、いまほど必要な時はないとと思うのです。

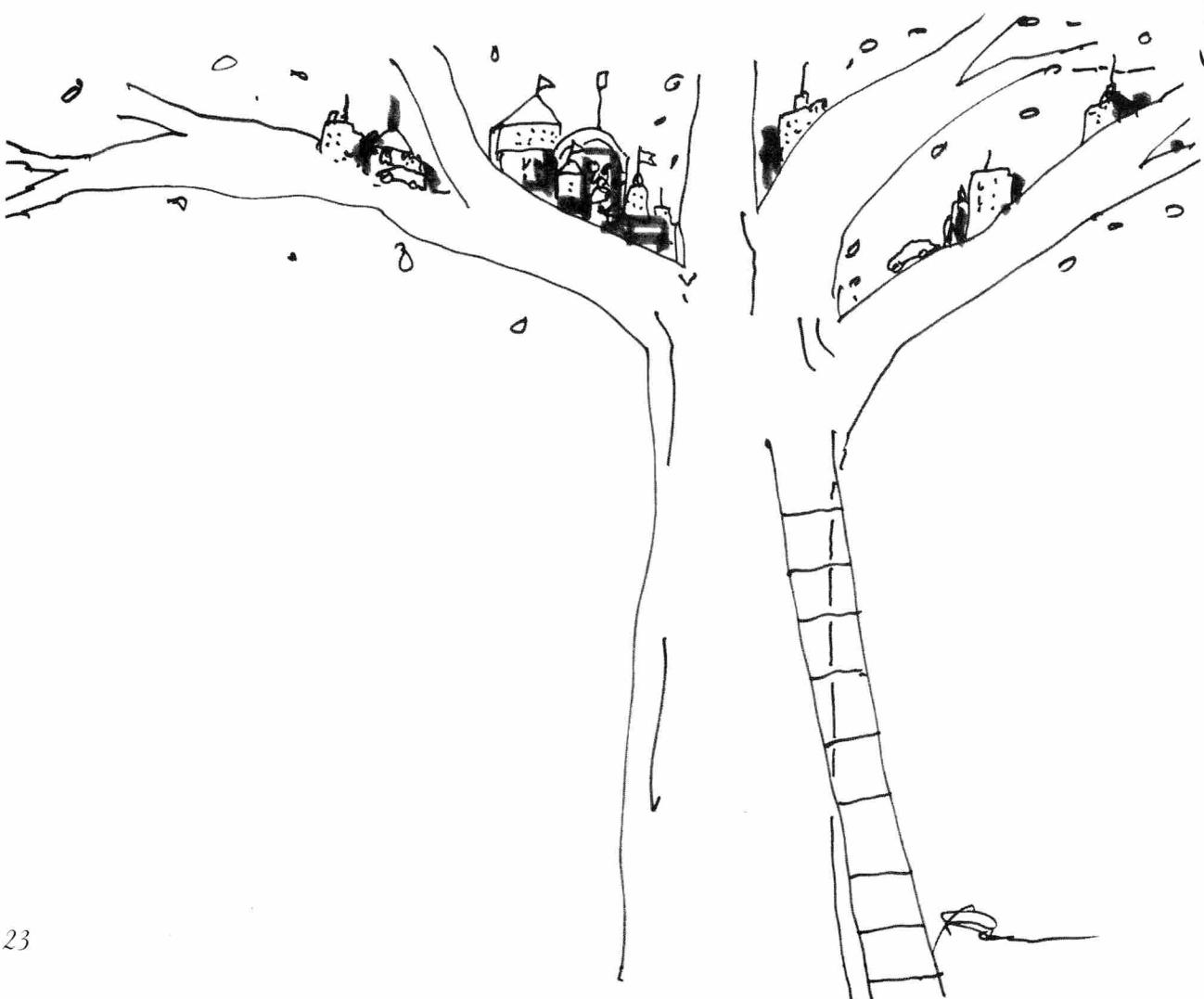


新しい感性の農業博覧会をやりたい

秋田には、種苗交換会という伝統的なイベントがあります。優秀な種子や苗を農民同士が交換しあう、文字通りの情報交換センターですが、ここに新しい知恵が加わって、「少年少女のための農業資料館」をつくり、大成功をおさめました。将来、生産者になる消費者になるかわからぬ子どもたちですが、地域の共感性を高めるよいイベントでした。

私たちはさらに、この種苗交換会がアメリカの「アグリ。プレックス」という常設の農業・バイオ専門の博覧会のように発展できなか、とその仕掛けを研究しています。

二一世紀の扉を開くキーワードは、技術・情報・文化、技おこし・人おこし・心おこし、ハードウエア・ソフトウエア・ハートウエアです。出でよ、土着のイベント・プランナー!



第三章 人を呼ぶ観光

嫁さん集めが観光の原点

観光とは、ひとつのもビリティ（人の移動）の一形態でしょう。その原点は、そこに住んでみたいというまちづくりです。

たとえば、わがまちが「住めば都」といえる自慢すべきところであるかどうかです。自慢できるまちには、活力があり、夢があります。夢は、日日を明るくし、明日の活力を生む原動力となります。そんなまちには、嫁さんが集まる事でしょう。女性が憧れ、訪れてくるまちづくり、それが観光政策のキーポイントではないでしょうか。

地域のイメージをよくする総合プログラムのなかにぜひ必要なのは、女性の感性を大切にした文化的で素敵な暮らしへの提案があることではないでしょうか。



泊まらぬなら泊めてみせよう観光客

東北の三大祭りのひとつである秋田の竿灯は、全国的に有名ですが、遠くからきてくれるお客様の、秋田での滞在日数が少ない、という声があります。

それは、レジャーの多様化や体験・学習・参加型のレジャー志向の時代に対応するメニューがないからではないでしょうか。

夜のイベントに朝のイベントを加えることによって、泊まつてもらうという工夫が必要です。たとえば、竿灯と朝市の組み合わせはどうでしょう。

都市の人びとが求めるレジャーは、変わった体験をしたいということのようです。秋田へ行くからは、秋田らしい体験をすることでしょう。秋田弁と素朴な人情のもてなしを求めてやってくるのです。

でも、素朴さと粗末さとはちがうものです。完ぺキに仕組まれたシステムのもとでの、高価な素朴さの提供が、いまこそ必要です。

夜の観光は屋台の風物詩からはじまる

いま、地方にいちばん欠けているのは、観光客に楽しく夜を過ごしてもらう仕組みではないでしょうか。

そこで、屋台によるひとつのイベント、夜の過ごし方の演出をもつと考えてみましょう。日本海からのとれたて鮮魚、山の幸、野の幸をふんだんに活かした名物料理や地酒のストーリー、さらには秋田のまちまちの祭りの再現や郷土芸能の“流し”など、他の地域にない屋台の風物詩としてイベント化すれば、まちの活性のシンボルになることうけあいです。

ただし、日本初・日本一のストーリーづくりが、その根底になければならない、と思うのです。

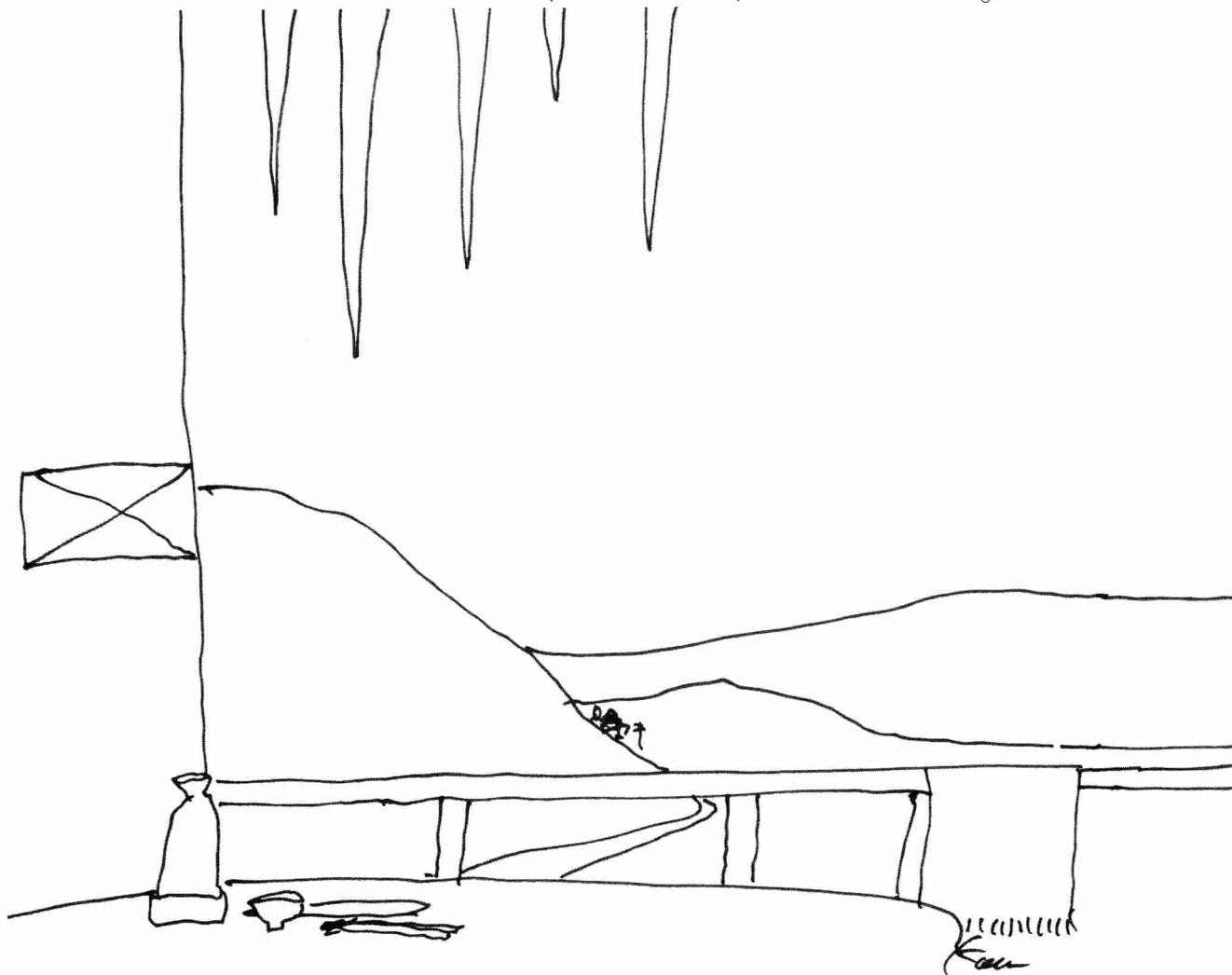


秋田雪見八景はいかが

マイナスイメージだった雪を、いまより以上に観光資源として活用できないでしょうか。この際、みんなで楽しみながら英知を集めてみましょう。

たとえば、雪を芸術としてとらえる雪の市民芸術祭やかまくら美術館、かまくら童話館、かまくら陶芸館、かまくら伝説館などの一冬だけの常設館をはじめ、かまくら屋台、かまくら世界のレストラン、かまくらコンサート、かまくら演劇祭などの一大コンベンションもできるでしょう。

また、雪を景色としてみせる発想で、雪の名勝地をあらかじめえらび、全国からきて、みて、選定してもらう「あなたが選ぶ秋田雪見八景」コンテストなどもできないでしょうか。

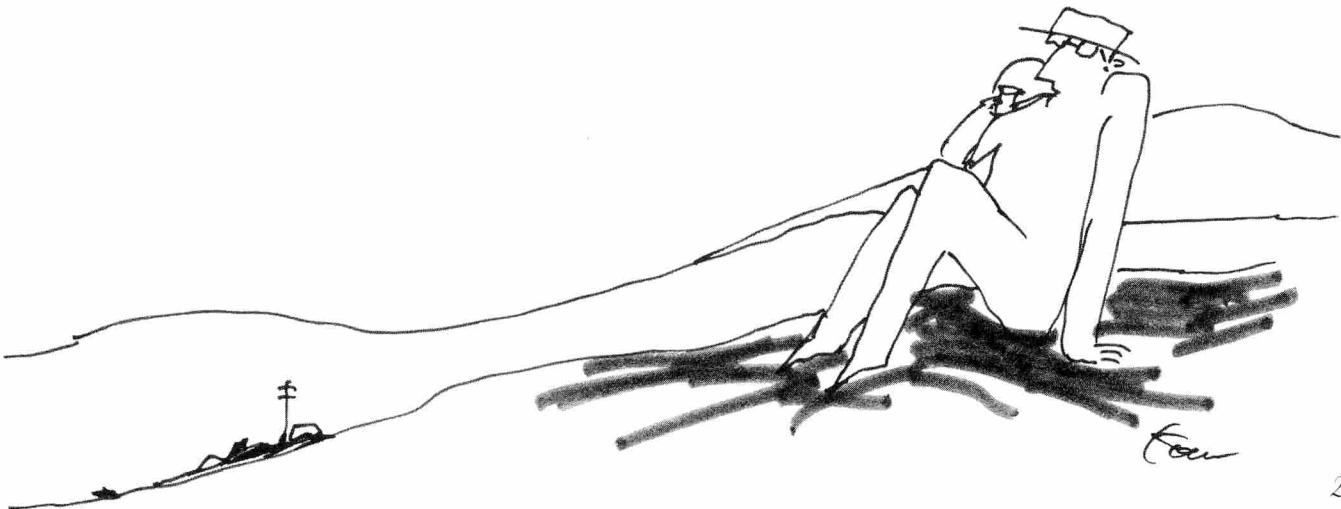
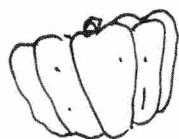


まごころというより「農魂」で観光にせまる

「まごころ秋田」という一大観光キャンペーンがありました。でも、大都会の人も農村地帯の人も同じ日本人、まごころはいつしょです。それよりも、個性や特色を持たせる意味で、「農魂秋田」という土臭く、骨太な観光イメージは、いかがでしょうか。

私の家の近くに、皆川嘉左工門さんという農民彫刻家がいて、毎年、田んぼのなかで、農民彫刻祭をやっています。山形のかかし祭の彫刻版といったところです。これなども、立派な観光です。

観光とは光を観ると書きますが、ほんとうは影をみ、そこの住民の心がわかるのが、新しい時代の観光でしょう。地域の空間を犠牲にする観光開発よりも、農魂を大事にしたイベントもまた大切でしょう。



第四章 雪と地域おこし

一夜漬けでは雪問題は解けない

雪おろしからの解放、雪と地域づくり――

は、私たち雪国の人びとの永年のテーマです。

しかし、この雪の問題は、雪だけでは解決できない総合的な問題であり、学生の一夜漬けの勉強みたいなかたちではなかなか解決できるものではありません。

雪に対する考え方は、二つあります。

ひとつは、機械力を使って、雪と真正面からぶつかっていく克雪の仕方。もうひとつは、エコロジカルに、雪や気象の生態系なりの力を逆に利用して克雪する方式です。

これから克雪は、後者の方法によることが賢明といえないでしょうか。

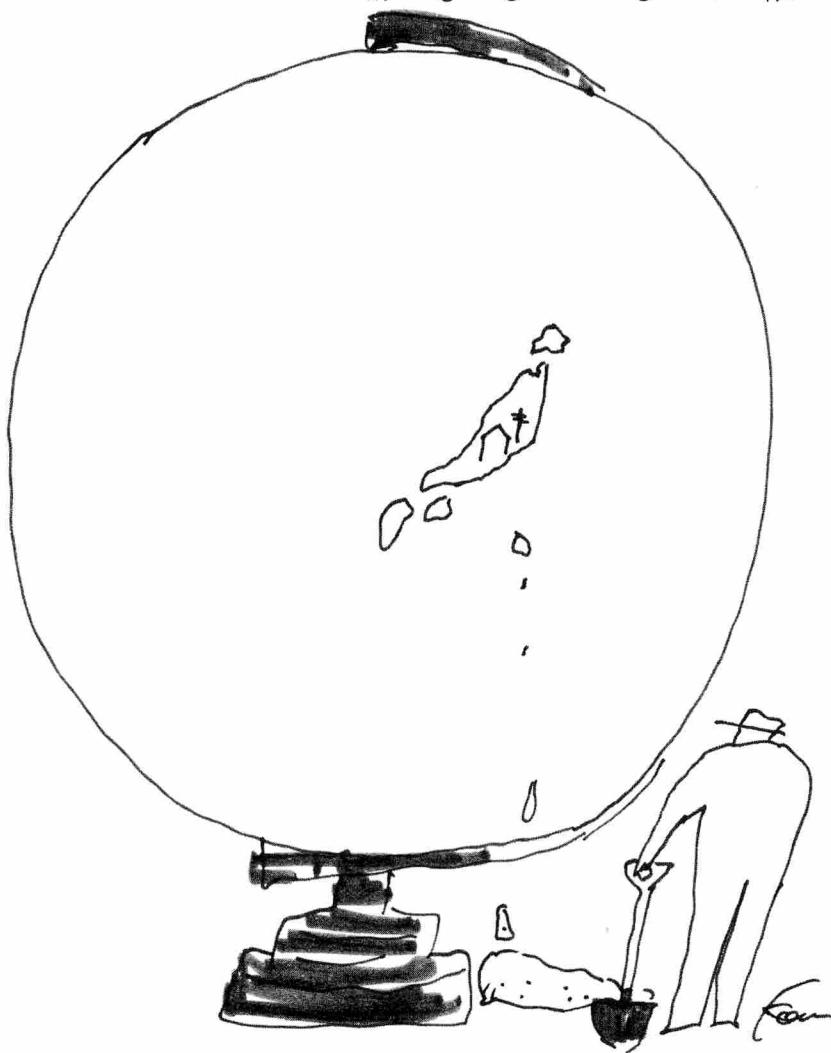


生活が屋根形状を変え、雪処理を変えた

雪を屋根に積み放しにして、冬を耐える、いわば無抵抗の克雪方式が、少なくも明治初期ぐらいまでありました。

そして、養蚕が盛んになるにつれて、屋根裏を有効利用する知恵が生まれました。その結果、屋根勾配が緩くなり、いまの雪おろしが必要になってきたのです。

この屋根勾配がそのまま、日本中に定着したというのは興味深い話ですが、建築技術も多様になってきたいま、人間の生活形態をあらためてみつめ直し、屋根の格好を変えていく発想も大事だと思います。



雪おろしを複雑にする都市化

雪おろしの労働力をどうしようか、といつた雪おろし 자체が社会問題化するようになつたのは、高度経済成長時代を迎えたころからです。それまでは、雪国の人々は半分失業状態でしたから、雪おろしは問題ではなかつたのです。

ところが、出稼ぎとか通勤兼業が盛んになりました、お年寄りや主婦が雪おろしをするようになり、事故がふえ、雪おろしが社会問題化してきたのです。

さらに、農村の中に都市化の波が押し寄せることになると、生活そのものが都会的になつてくると、日常の生活費もそこそこながら、人に頼む雪おろし経費の重さで、かえつて、出稼ぎや通勤をして補わなければならぬ皮肉な事態が生じている、といえないでしょうか。

都市化したいまこそ、エコノミーな克雪のシステムが必要とされているのです。

雪おろしの経済学・不経済学

“雪おろしの経済学”というものがあるとすれば、以前は雪おろしというのは無償の労働だったのですが、現在は雪おろし作業は冬場の地域の現金収入の重要な糧かずになつていて、といえます。しかば、雪おろしを頼む側の発想からすれば、雪おろしのために出費がふえることになります。雪が降らない地域であれば、その分だけ生活を豊かにする費用に回すことができるのですが……。

経済活動とすれば、たしかに土建業関係の人たちは冬場は仕事がなくなりますから、雪おろし作業に就くことはありがたいことです。が、春になると消えてしまう雪のために一冬何万円もの支出をすることは、地域全体では不経済なことです。この雪おろしがつづく限り、雪国の生活はよくならないということでしょう。

いまこそ、雪おろし不要の住宅の普及が、雪国の明日をひらく切り札となるのです。



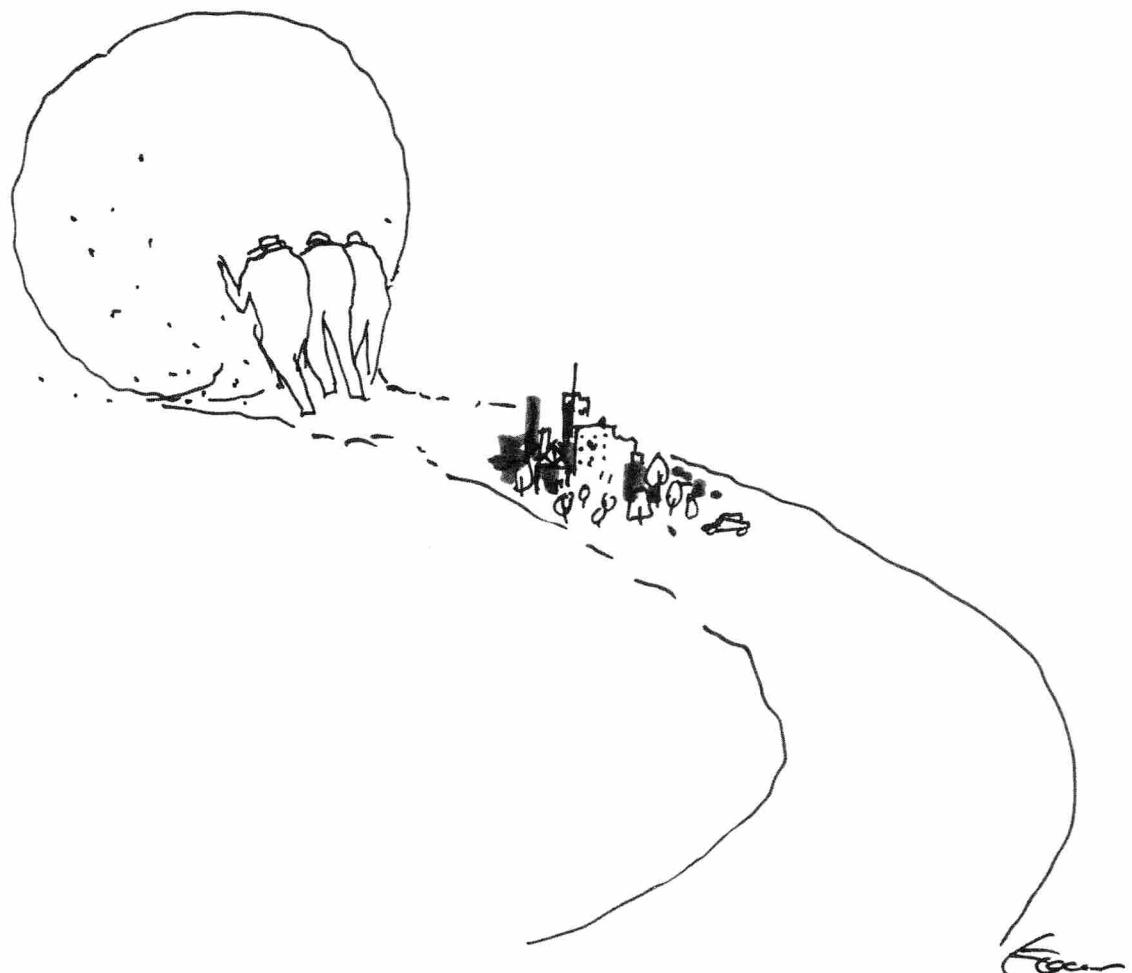
克雪都市づくりは住民が担い手

流雪溝、消雪パイプ、アーケードなど、雪を活かした都市づくりの方法はあっても、いざこれをやるには、莫大な金がかかります。

雪おろしにしても、それぞれの地域がいろんな方式で試行錯誤しているとすれば、それをより組織化して、合理的なシステムにしていくことが必要ではないでしょうか。

そうしたなかで、住民自身が自分たちの地域は、たとえば気温融雪方式だと、風切り方式だと、自然落下方式がいいんだ、ということがだんだん煮つまつてくるでしょう。

その段階で行政などが参加し、その地域の方式を住民とともに築き上げていく、それがこれから克雪都市づくりの行き方だと思います。



子どもたち優先の雪国づくりを

「雪と地域おこし」を考えた場合、いちばん避けて通れないのが、学校の問題です。

雪による通学の不便さこというものがいま、学校の統合問題の根底にあります。現在は子どもが讓歩している格好です。端的にいえば、木造校舎から鉄筋コンクリートへ建て替えることが主眼で、通学距離の長距離化ということは子どもにしわよせがいつています。

本来、子どもが成長のために使える自分の時間が、徒歩のために費やされるということは、永い人生からみるとたいへんなロスです。

カナダなどでは、むしろ小規模校を整備し、学校に通えないところに子どもがいると、そこに学校を建てるという方向です。

全国画一的な学校づくりではなく、積雪地帯特有の教育サービスがうけられるシステムを考える時がきています。



第五章 地域の福祉・家庭の福祉

女性にしわよせがくる福祉ではいけません

人はだれでも、一生のうちに、ハンディキャップを持つ期間を過ごします。

その“へこみ”をどう埋めるかが、問題です。埋め方の選択肢があるほど、ハンディキャップを持つ人々の生きる充実度は増すことでしょう。介護する方も、介護される方も、ともに解放されることがいちばん望ましい福祉です。女性にしわよせがくる福祉ではありません。

いまこそ、日本の基礎を築いてくれた先輩たちに、尊敬と感謝の心をささげる福祉体系・住宅政策・医療体系づくりをしなければなりません。国民のすべてが、「死ぬまで健康でいたい」といっています。高齢化社会にふさわしい、新しい福祉のあり方が問われています。



介護する人には自由を、介護される人には尊厳を

平均寿命がのびて、九〇歳のおばあさんを七〇歳の娘さんやお嫁さんが介護するようなケースも出てきました。老後の問題は即、女性の問題としてとらえられる時代ともいえます。

都会ではお金で解決できることもありますが、農村社会ではそうもいかない状況です。

たとえば、老人ホームひとつとつてみても、もつと規模を小さくして、地域のなかに入つていく政策を立てるべきです。

介護する人には自由を、介護される人には尊厳を！ そして、女性が生き生きできる地域づくりが、いま、最大の課題です。



車椅子と同じ高さで目をあわせれば

車椅子で歩ける都市構造にしたけれど、社会の目が歩ける状況をはばんでいる。こんなケースが、日本中、いたるところにある、といえませんか。

ハンディキャップを持った人たち自身の精神的解放は、まわりの人たちの意識の変革があつて、はじめて存在するのです。

車椅子の人と話をする時にも、みおろすかたちではなく、腰を低くして視線を同じ高さにする対応ができて、はじめて共存の社会です。政治の目も、車椅子と同じ高さになることを、私は主張しつづけます。

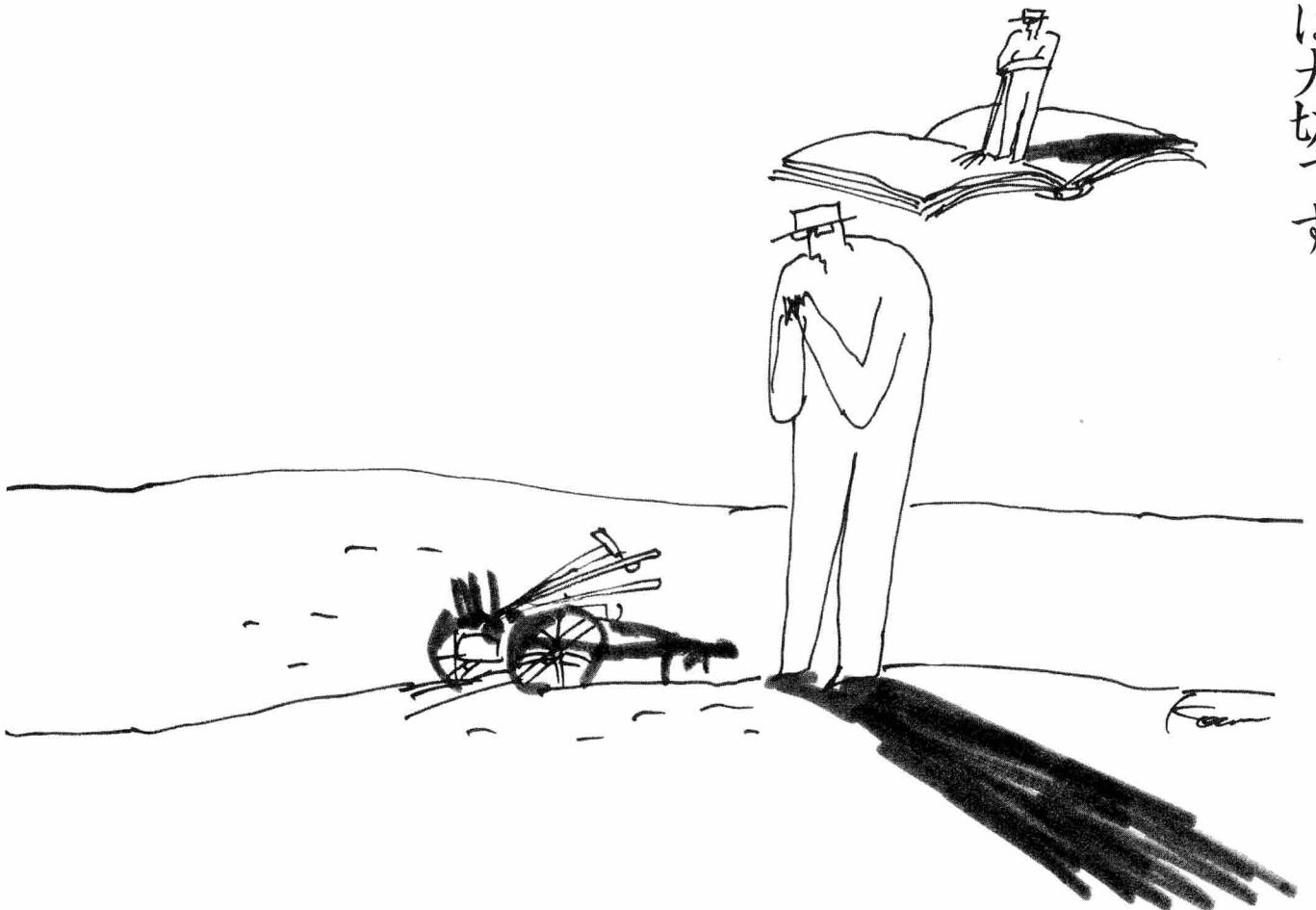


まわりくどそなやり方がほんとうは大切です

ヨーロッパ諸国では、老人ホームなどに入居する場合、直接、本人に手当てを渡し、本人自身の手で施設にお金を払います。

そのねらいは、本人の尊厳への配慮が根底にあるからです。

また、障害者の雇用についても、人間の価値、精神の尊厳は労働することにあるのだという理念に立ち、元気な人たちに交じつて働くことをすすめています。弱きものを助けるという同情的な視点や生活保護をするという一方通行の福祉ではなく、社会・生産に参加している喜びとともに分かちあう福祉こそが、いま、求められているのではないでしょう。

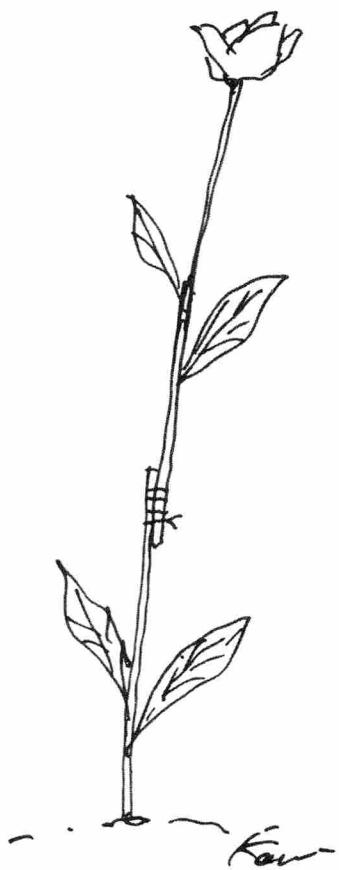


幼い時の福祉体験が明日の福祉をつくる

小さい時からの教育が、ハンディキャップを持つ方への理解度や共感性を育てるうえで、大きな意義を持つと思います。

そのための学校教育の制度を考えていかな
ければなりません。

欧米では、学校教育のカリキュラムの中
に、ボランティア体験が組み込まれています。
次代をなう子どもたちが、ハンディ
キャップを持つ方を実体験をとおして理解し、
生命の尊さ、人間性の確立とともに考えながら
生きていく、「生きた福祉のための次世代
教育プログラムづくり」に、いまこそ取り組
むべきでしょう。



第六章 新しい時代の教育

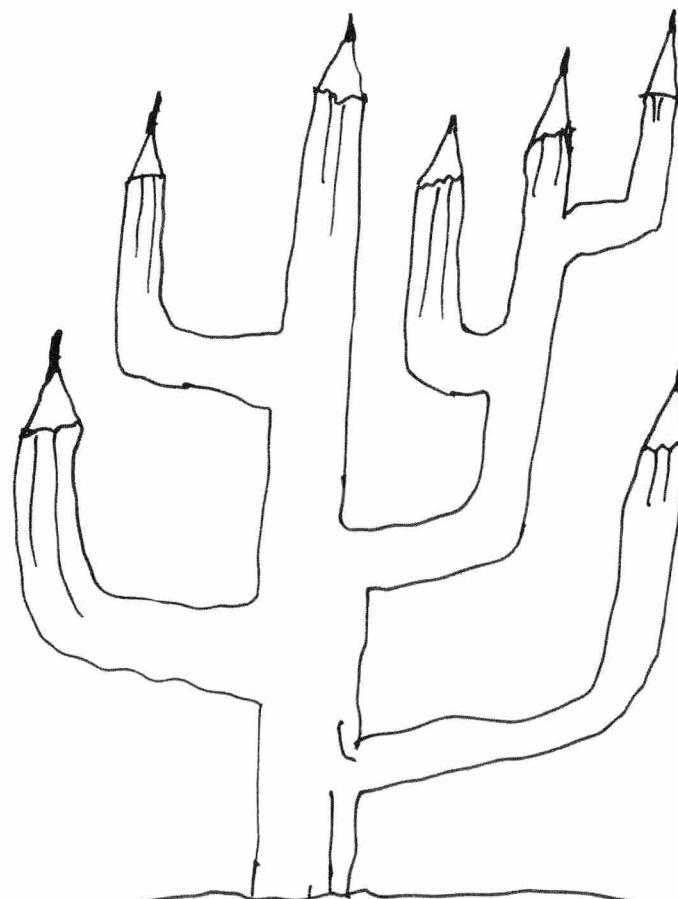
創造教育を考える

教育改革論議が盛んです。しかし、私自身は、政治家が生兵法で教育改革に取り組むことのあやうさを感じています。

少なくとも、このことだけはいえるでしょう。二一世紀社会の求める人材像が、これまでとは大きく変わりつつあるということを。

それは、ものまねからクリエイティブ（創造的）な人間への価値転換でしょう。現代の技術革新が大きく飛躍するためには、既存のトレンド（時代の流れ）を脱却した新しい教育の概念づくりが必要になつてきます。

そのために、次代にそなえ、いま子どもたちにいかなる教育プログラムを用意するか。二一世紀まで、あと一五年たらず。新しい時代にあつた新しい教育の体系づくりが、いまほど求められている時はないでしょう。



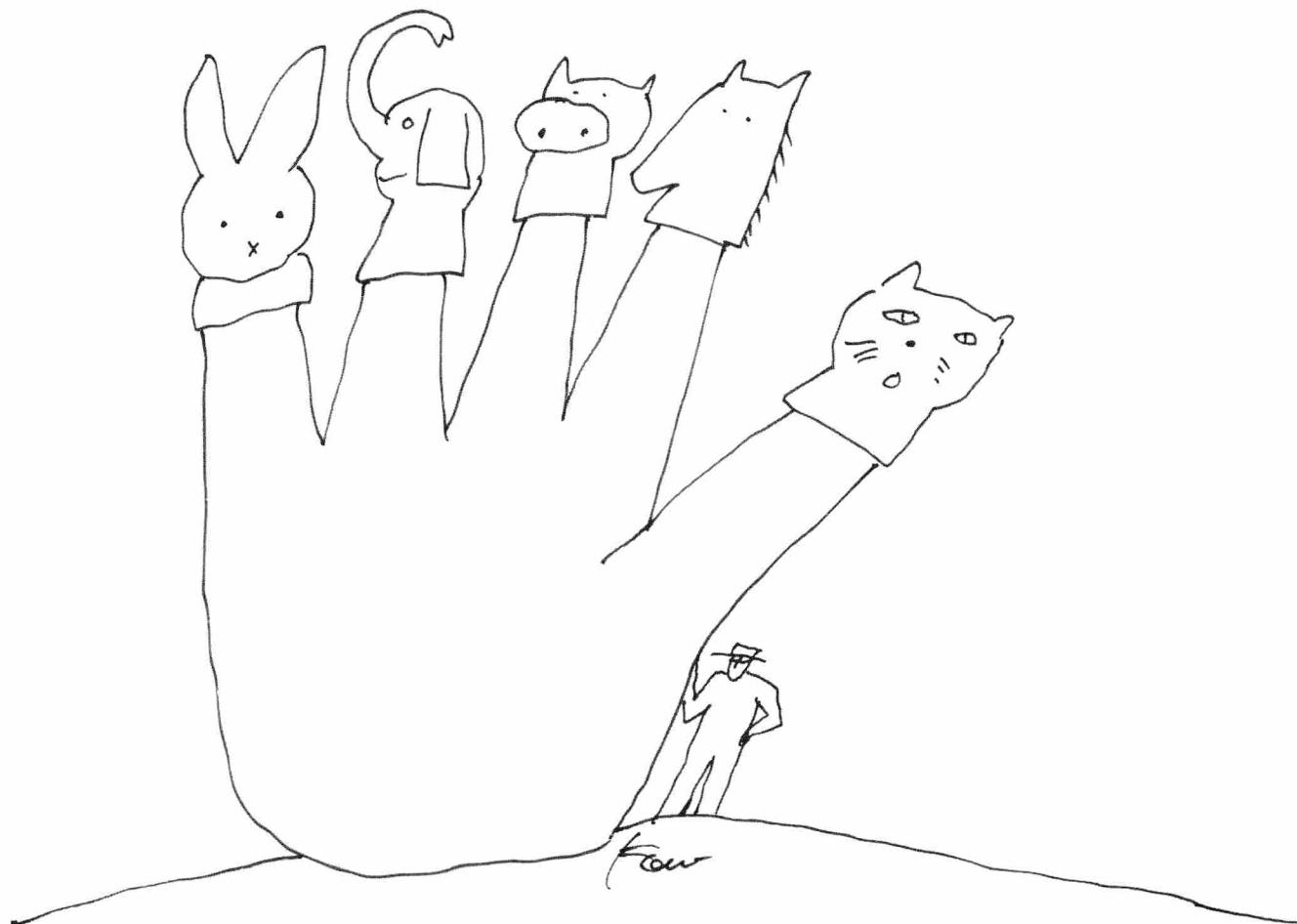
教育の原点は「手先教育」にあり

幼稚教育で、近ごろ「手先教育」ということが呼ばれています。

おもちゃがないと遊べない子どもは本来の姿ではなく、身近なものならなんでもおもちゃにしてしまう子どもこそが自然の姿ではないでしょうか。そういうごくシンプルな考え方方が、「手先教育」の基本になっているのです。

考えてみれば、この考え方は新しくもなんでもありません。ひと昔前の子どもたちなら、小川のそばの籠で舟をつくつたし、竹で水鉄砲をつくつたりもしました。

なにもなくても、身近なものでなんとかなるという考え方や教えは、単に幼稚教育ということだけではなく、なにもない時の生き残り術にもなる「サバイバル教育」もあるのです。

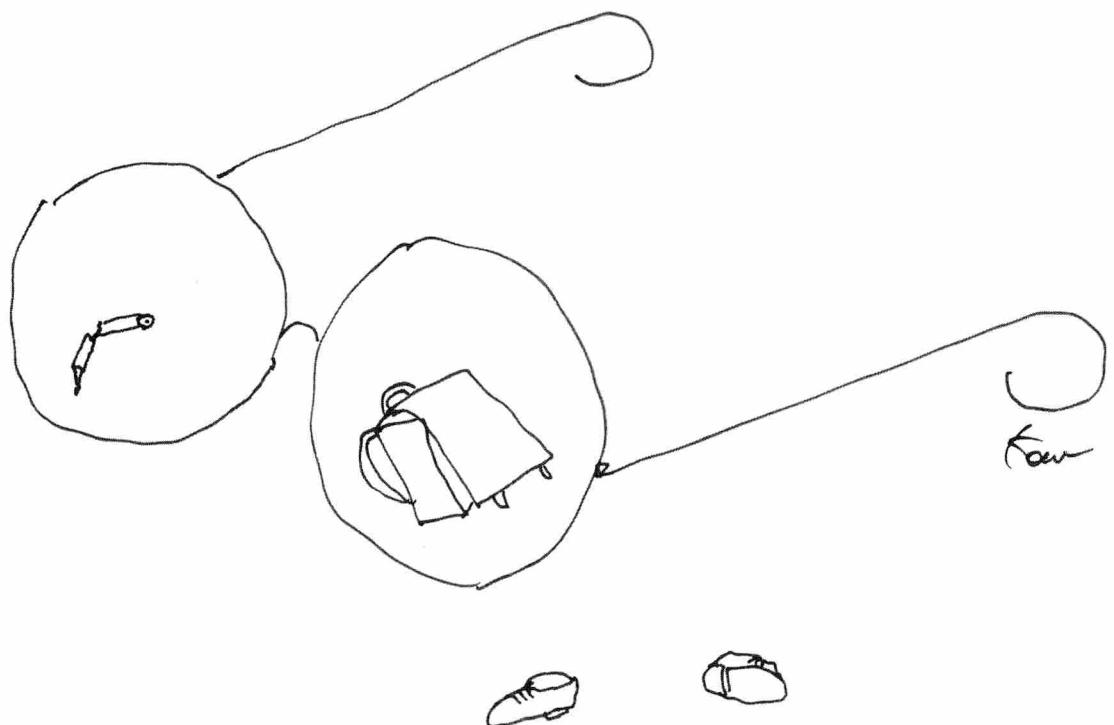


おばあちゃん子には登校拒否児童が多い

農村の子育てが変わってきてています。農村の都市化とともに、親たちは極度に忙しくなりました。お母さん方のほとんどはパート、お父さん方のほとんどは勤めということで、いきおい子どもたちの保育園への送り迎えや日々の教育は、おばあちゃんの仕事となりました。

厳しい母親から、どちらかといえば孫に甘いおばあちゃんへの子どもの手渡し、そこにいろいろ問題が生まれつづります。

ある機関がおこなった調査によると、おばあちゃん子には登校拒否児童が多い、との結果が出たそうです。「三つ子のたましい、百まで」といわれます。幼児の大切な教育の時期を、おばあちゃんにあずけたり、他人任せにするのではなく、母親のもとにふたたびとりもどすためにも、政治の仕事は山積みしていることを痛感しています。



“えづけ”と“しつけ”と運動

人間の祖先は、猿でした。猿が人間に進化したのは、大脳が発達したからです。なぜ大脳が発達したかといえば、手と足を使つたらです。手と足で道具をつくり、その道具で動物を倒し、その動物を食べることで、動物性蛋白質をとつたのです。その過程で、猿をしのぐ大脳が発達してきたといえるでしょう。では、人間の原点から考えた教育とは、なんでしょう。それは“えづけ”と“しつけ”と“運動”だ、と能力開発・所長の安藤一男さんはいっています。

小さい時から、塾へ行け、勉強せよ、と神経質になつたり、無理やり詰め込んだりして、いじりまわさないで、むしろ手足を十分に使わせる大脳を発達させることがいちばんとうのです。私も、大賛成です。



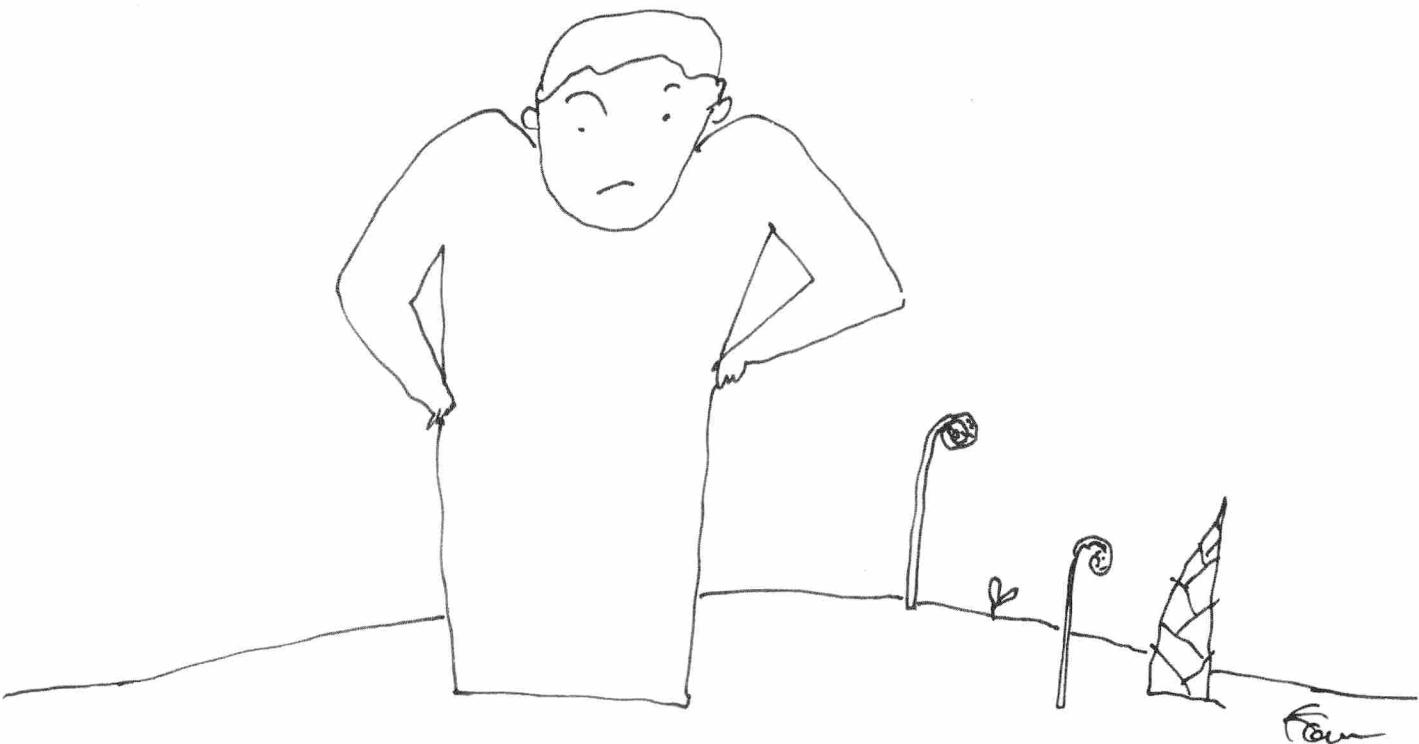
少年よ、大志を抱け！

いま、教育界での暗い話題は、“いじめ”と“自殺”的問題です。なぜ、こんな問題が起ころうのでしょうか。それは、少年少女たちのそれぞれの個性や価値を評価し、それをさらには伸ばす社会的なシステムが、学校と家庭の双方に欠けていたからではないでしょうか。

いまこそ、教育に少年少女たちの長所をひきだすモチベーション（動機づけ）・プログラムが必要なのです。

「少年よ、大志を抱け！」というクラーク博士のことばを今日的に考えてみると、私たち大人がいかに彼らに対し、大志を持ち、希望を掲げる仕組みを用意しなかつたかに気づきます。

二一世紀は、彼らの世界です。彼らの生き生きとした大志の発露が、新しい日本を創るこということに、一刻もはやく目を向けなければなりません。



第七章 これからの中土・地域づくり

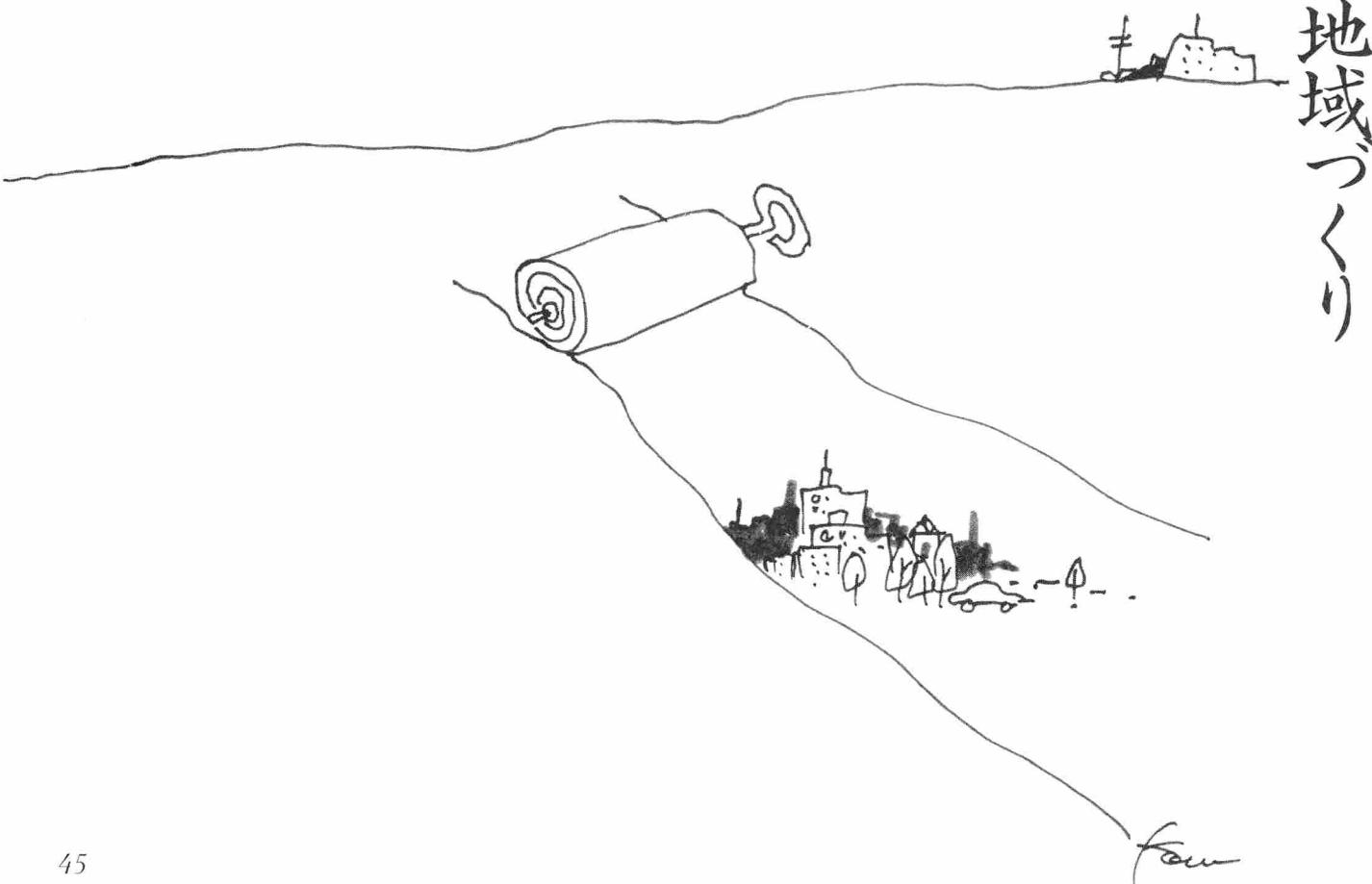
国土づくりに新しい視点を

おじいちゃん、おばあちゃん、そして孫たちがひとつ屋根の下でしあわせに暮らすためのプログラムづくりのためには、これまで述べたような地道な地域おこしの考え方だけではすまないネックも生まれてきます。どうしても、大きな開発の機動力が必要になつてきます。

しかし、従来のハード中心の、ただ橋をつくる、道路をつくるといった考え方では、新しい国土づくりはできないでしょう。

住宅や道路も、ただ住めればいい、ただ通ればいいというのではなく、こうしたハードも大切ですが、これからはそれをとりまく快適環境づくりへの誘導策なり、引き金となる開発手法も用意しなければなりません。

つまり、新しい視点に立った国土づくりの手法をみつけださなければならぬ時がきているのです。



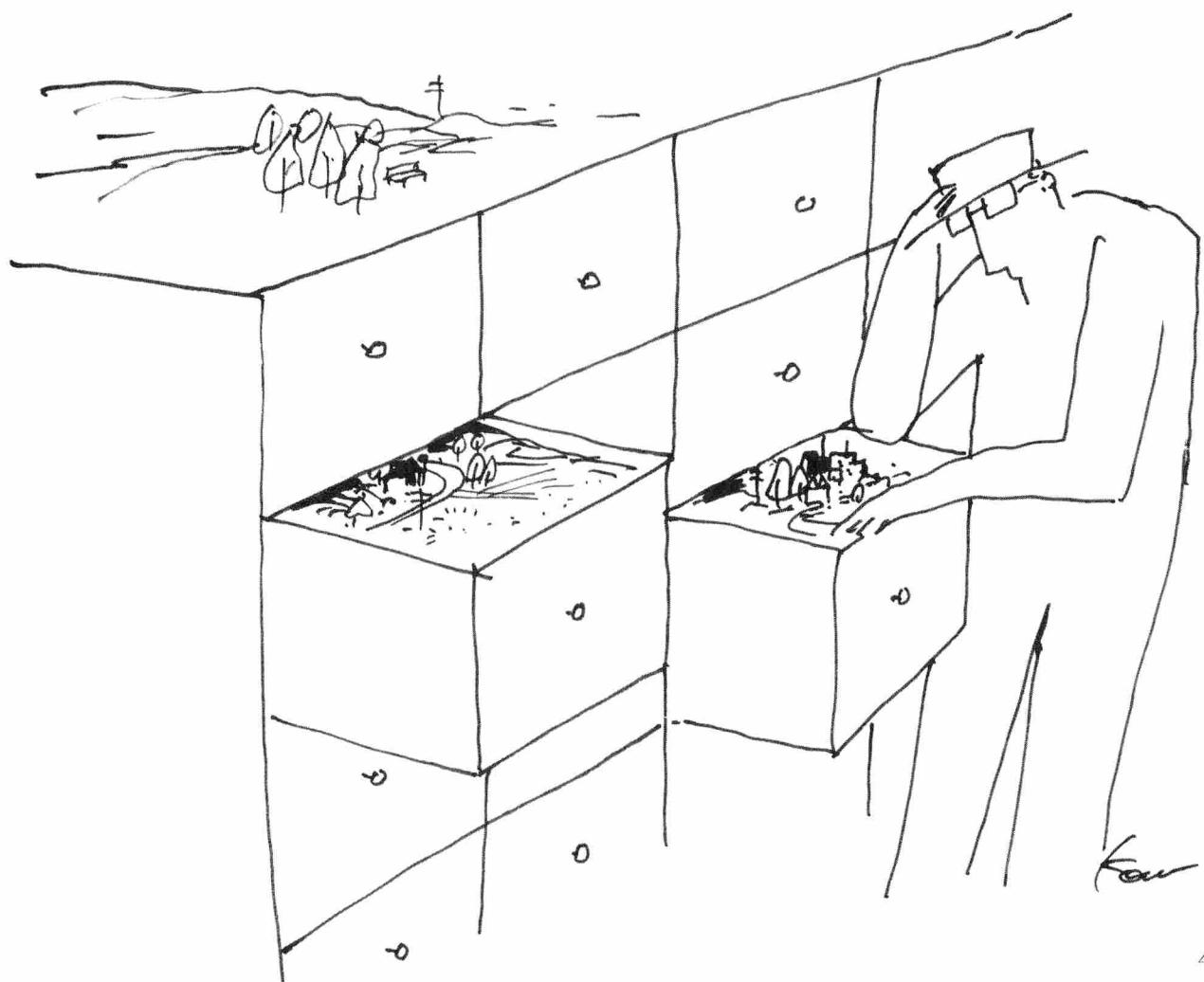
土地開発の新ソフト

魅力ある都市づくり、人の集まる地域づくり、これをめざすことによって、都市・地域の個性や活力が生まれます。そのためには、どうしたらよいのでしょうか。

それには、たくみな都市・地域のイメージづくりや新しい開発のシステムが要求されてきます。

そのひとつに、土地信託方式があります。これは、土地を手放さなくても、制度化された資金がつき、いい設計者によるいい施設が建設できるという方式です。

この方式は、民間の土地のみならず、国有地にも拡大でき、広大な用地を活用した人の集まる国土づくりができる可能性を持つています。そのうえ、いろいろな面で、たとえば税制上の優遇措置もとられ、効果が効果を生む地域発展の引き金ともなる新しい手法といえるでしょう。



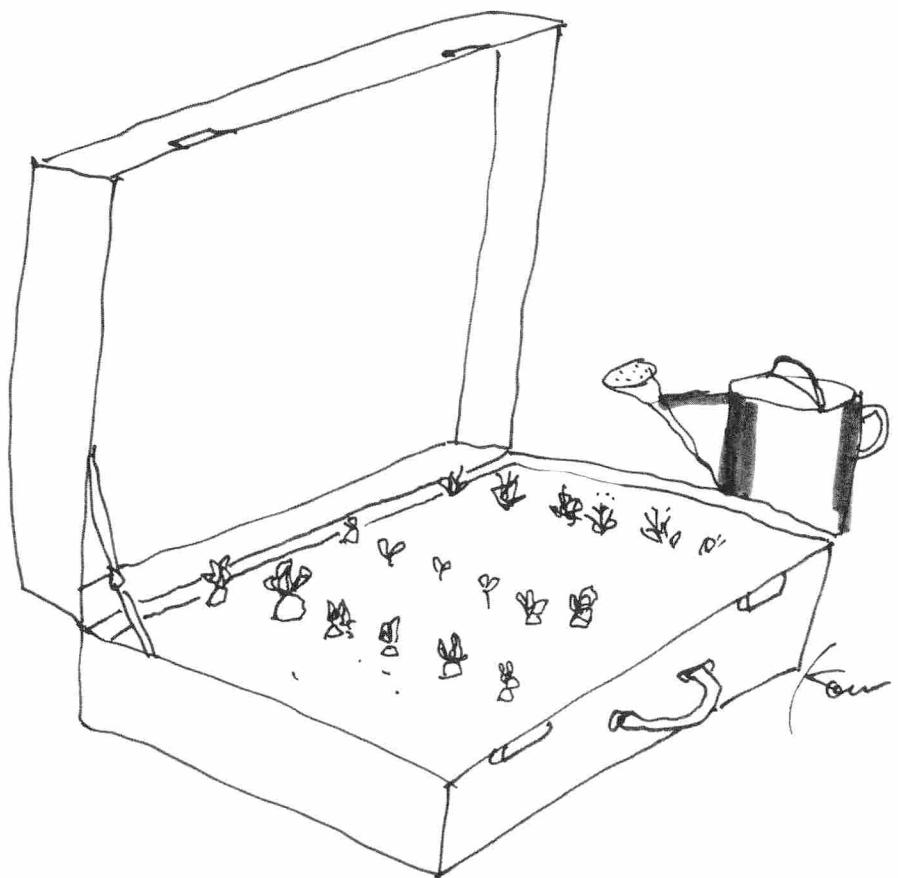
地域のアイデンティティをつくろう

いま、地域の人びとは、ストーリーのある開発を求めています。そして、わが地域が将来、どんなふうに変わっていくかという「絵」をみたいのです。

それは、計画の意図、創造上のプロセス、完成イメージを理解し、最初から参加したい、という意欲のあらわれでもあります。

それには、基盤となるわが地域の“資産”（自然資源や歴史・文化資源など）を新しい血と感性によつて、どのように情報化し、育て上げていくか、という地域のアイデンティティ（愛郷心・生き方・思想）を確立することです。

たとえば、「○○王国」「××のメッカ」「あの□□」といわれるような地域づくりのストーリーをつくることでしょう。それを住民に提示することが、地域をつくるキーポイントであり、原動力となることはいうまでもありません。



そして…「かまくらとぴあ」づくりがはじまる

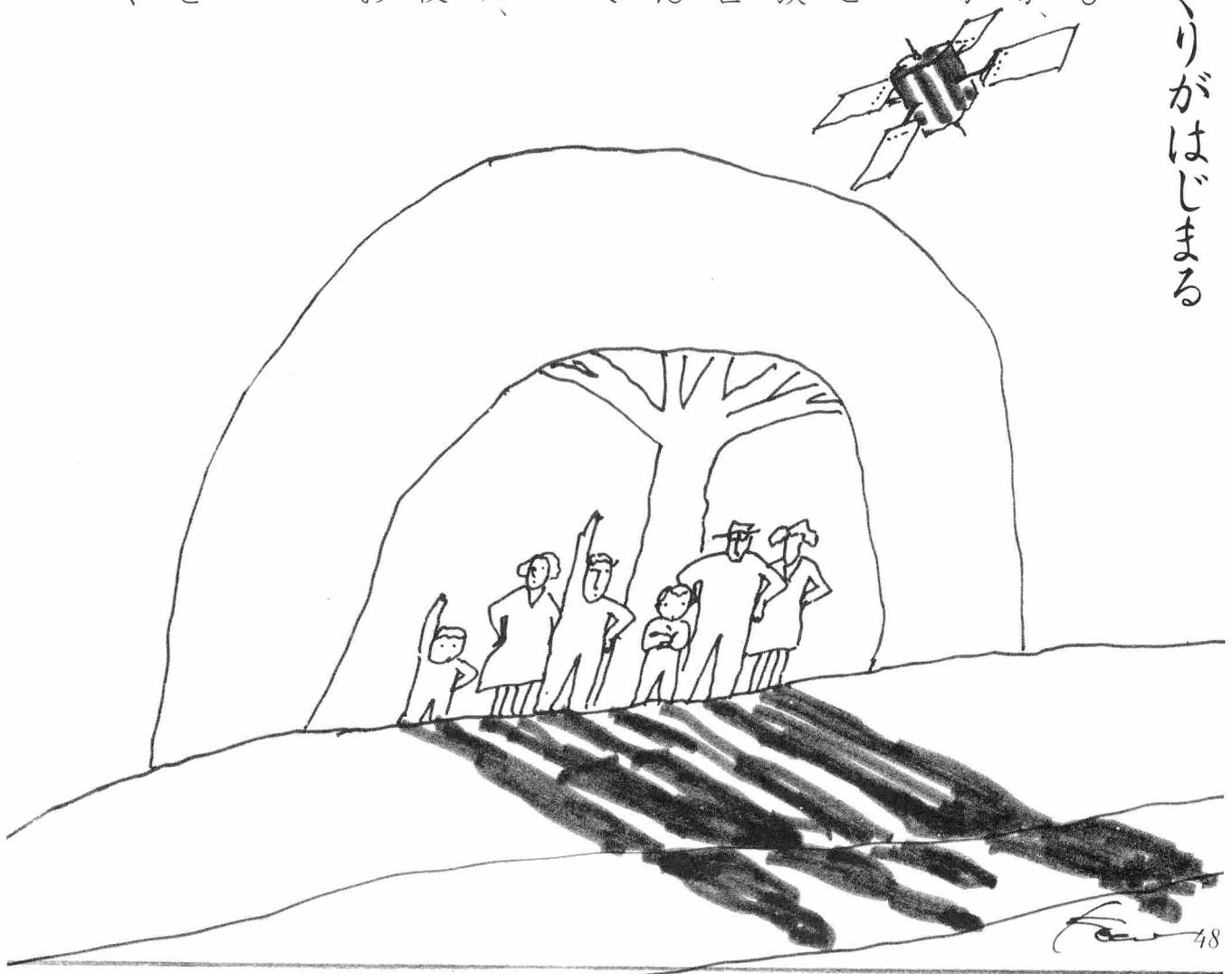
私なりに書きつづつてきた「かまくらとぴあ」づくりをめざしての絵ものがたりですが、これはこれで終わりではなく、まさにこれからはじまるのです。

私の心のなかに描かれている「かまくらとぴあ」の風景は、あちこちでしあわせな家族が三世代同居で団らんしているあたたかい世界です。おそらく日本のなかでは、いちばんしあわせな家族像、そして地域像ではないでしょうか。

この「かまくらとぴあ」の絵ものがたりに、さらに色づけし、現実のものにしていく主役は、地域のみなさんです。おじいちゃん、おばあちゃん、若夫婦、そして子どもたちの、それぞれの英知が役立つ時代です。

ともに、「かまくらとぴあ」にはのぼのとした明かりをともしつづけるノウハウをつくりだしていきましょう。

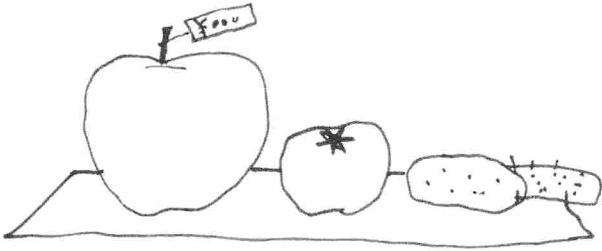
雪国の未来をひらくために――。



「かまくらとぴあ」づくりのアイデア玉手箱——筈山登生・雪国活性化のデザイン

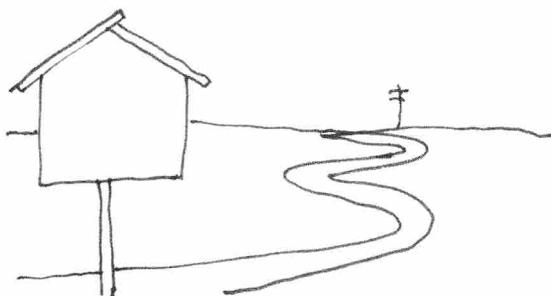
村の正直バザー

おじいちゃん、おばあちゃんよ、畑の新鮮野菜やくだものを道端に並べて、道行く人に売ってあげたら。お客さま心を信じた無人の正直バザーです。ちょっとした小遣い稼ぎになりますよ。



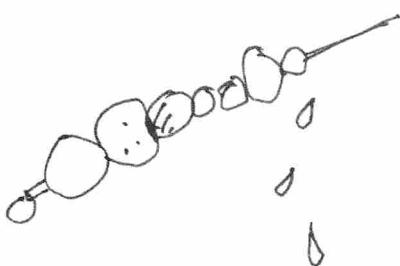
歴史の散歩道

町や村の坂や小路に、歴史の道標をつけましょう。そのつれづれに、俳諧の道、和歌の道、万葉の道、薬草の道などの手づくり街道はいかがですか。



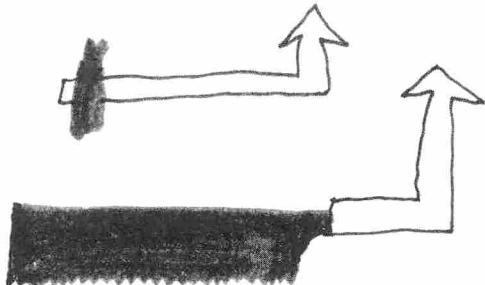
イノシシ丸焼きバーベキュー大会

イノシシに限らず、牛や豚などを広場で丸焼きにして食べる野趣に富んだバーベキュー大会は、バカ受けします。恒例化すれば、名物の観光イベントになるでしょう。



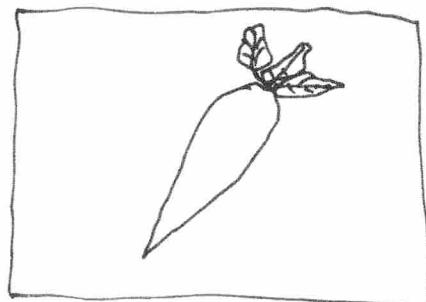
少年少女のD I Y（自分でやろう）の森

都会の少年少女が参加して、樹を植えたり、木工を楽しんだりする日曜大工（ドゥ・イット・ユアセルフ=D I Y）の森をつくり、都会に向けて手づくり情報を発信しよう。緑が新しい付加価値を生む時代がきました。青少年団体に分収する制度もできます。



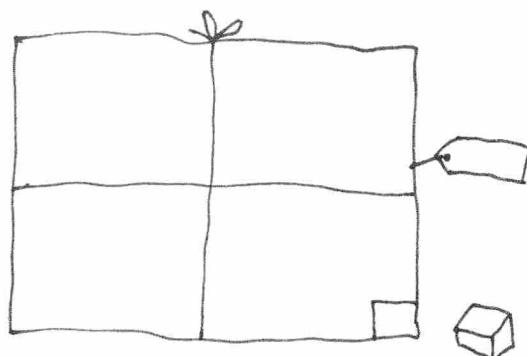
地下雪室冷凍冷蔵庫

地下に穴を掘り、積もった雪を圧縮し、氷の部屋をつくります。秋の収穫物を半製品にして袋詰めし、雪をかぶせれば、即席の自然の冷凍冷蔵庫が出来上がります。鮮度を保ち、甘味を増す、という実験結果もあります。



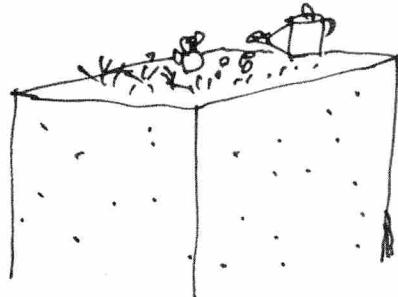
雪の宅配便

雪のない都会の子どもたちのために、運送会社に協力してもらい、雪のある地方へ荷物を運び終えて空になったトラックで、雪をプレゼントするのです。学校のグラウンドなどで、雪を小山にして、雪ダルマづくりや雪合戦などの体験をさせてあげたいと思います。



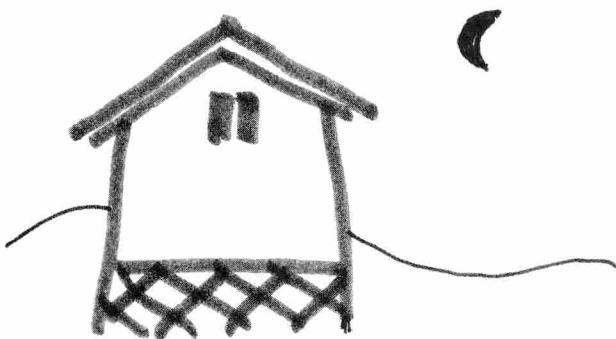
一坪健康農園システム

農業体験ができる農園を開発したらどうかしら。コンクリート・ジャングルで暮らす都会の人たちよ、家族いっしょに野菜を育ててみましょう。子どもたちの情操教育にも役立つと思います。子どもたちに収穫の喜びを与えてやりたい。



北の宿は「酒蔵の宿」で

酒の町、酒の秋田のイメージを生かした「酒蔵の宿」はいかがでしょう。役に立たなくなつた酒蔵を、内装を完備して宿泊施設としてよみがえらせ、ふたたび利用するのだ。ペンションに負けない、高い集客効果があがるのではないか。



花ゲリラ

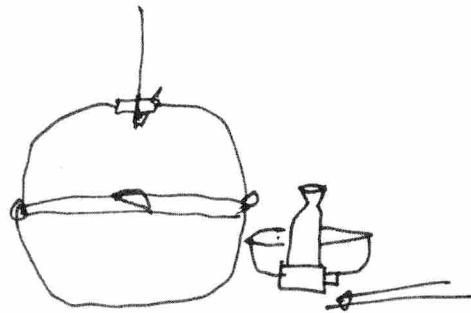
背広のポケットのなかにあった数粒のタネを空き地に埋めたら、半年後、そこにきれいな花が咲いていました。空き地を花で埋めましょう。これを「花ゲリラ」といいます。だれがまいたか知らないけれど、とにかく、まちに花があふれています。

ほほえましい悪戯ではないでしょうか。



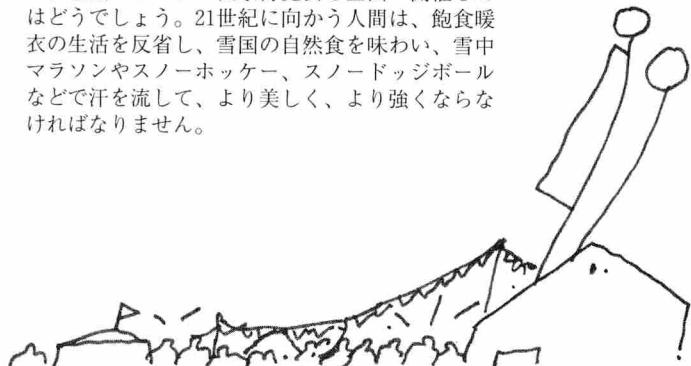
風流いも煮会

地域住民あげての、いもの「ごった煮野外パーティー」です。各家庭の味つけコンクールもできます。農繁期が終わったひととき、月をみながらの風流もまた格別です。



雪国スポーツ・健康博

日本の国土の約半分は積雪地域で、そこに約2000万の人びとが住んでいます。ですから、雪国での新しい生き方や地域振興戦略を諸外国の体験もじえて多角的に研究・開発して、「雪国の時代」を築き上げていくために、「美と力」をテーマに雪国スポーツ・健康博覧会を企画・開催してはどうでしょう。21世紀に向かう人間は、飽食暖衣の生活を反省し、雪国の自然食を味わい、雪中マラソンやスノーホッケー、スノードッジボールなどで汗を流して、より美しく、より強くななければなりません。



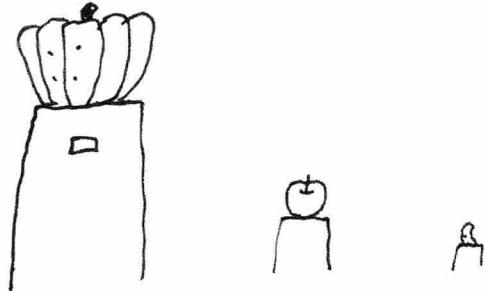
サバイバルの森

エンピツも削れない、骨がちょっとしたことで折れてしまう、という最近の子どもたち。彼らに、大自然のなかで生活する経験をさせてあげたい。星明かりの生活、一日仙人、小動物公園などを付帯させたら、一生の宝になるような体験ができます。



彫刻ポケット公園

数が少なく、狭いといわれるわが国の公園ですが、工夫次第でもっと楽しいものになると思います。たとえば、公園などに市民の彫刻を立てたらどうでしょう。この野外の彫刻ポケット公園は、町のオアシスとなり、文化のシンボルとなります。



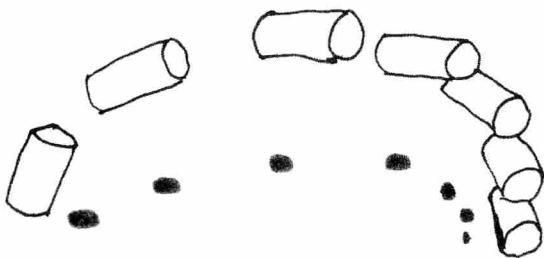
都市の手鏡

まちのアイデンティティを確立するために、まず「住めば都」の自己診断をしたいものです。まちを構成するさまざまな要素を洗いだし、特徴を見直し、また類似都市との比較もしてみるといいでしょう。そうすれば、新しいまちの姿が浮かび上がり、メイキャップのためのひとつの指針となるでしょう。



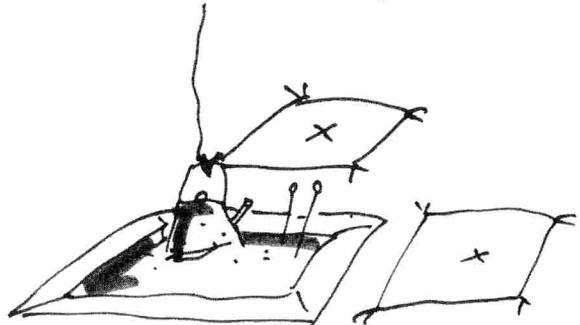
カンコロジー・ウォークラリー

老若男女がおおぜい集まって、ふれあいの輪を広げながら歩こう。道端に落ちている空き缶などを拾いながら。健康と社会美化の一石二鳥の、この運動を定期的な行事として展開できたらと思います。空き缶を売って、子どもたちの交通傷害保険に集団加入もできます。



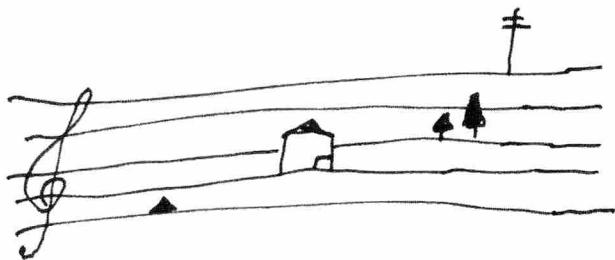
なんでも校長先生

民話の聞かせ語り上手な人とか、歴史の語り部というお年寄りたちは、けっこういるものです。この人たちの能力を生かすことのできる学校をつくったらどうでしょう。それは、若い人がお年寄りから生活の知恵を学ぶことのできる新しいコミュニティ・カレッジといえるでしょう。



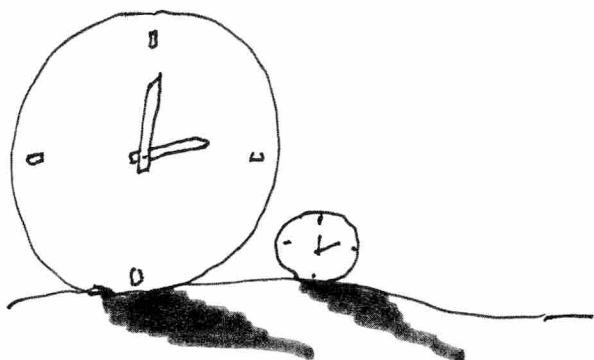
ヘンデルホール

宮城県中新田町は、「バッハホール」という本格的な音楽ホールをつくり、音楽の町として活性化に成功しています。そこで、秋田でも田沢湖畔あたりに「ヘンデルホール」をつくったらどうでしょう。ヘンデルには、湖畔の霧氷気にあった「水の上の音楽」などの音楽もあるのですから。



お隣り同士……老人ホームと幼稚園

老人ホームと幼稚園とを、隣り合わせに立地したらどうかしら。お年寄りにとって、よその孫と友だちになれるということで、生きがいが生まれ、幼児にとっても、ひとつの社会体験ができるになります。



●著者のプロフィール

笹山登生 (ささやま・たつお)

昭和16年、秋田県横手市出身。水瓶座。慶應義塾大学経済学部卒業。政府系金融機関につとめ、政策金融を学ぶ。昭和55年に秋田2区から衆議院議員に当選。現在、連続2回当選。大蔵委員会理事、豪雪などの災害対策委員などをつとめるかたわら、若手議員同志で政策集団をつくり、いくつもの政策提言を発表している。また、地元でみずから名前からとった登竜塾という名の地域づくりの塾をひらいたりしている。キャッチフレーズは、「燃えろ農魂、拓け新時代」。ともすれば、失われがちな農の心を大事にし、それをベースに新時代に向かっていこうとの気概がんばっている。

子どものころから、大の機械好きで、コンピューターをはじめ、機械と名のつくものは何でもこなす。メカきち。家族は、妻に男子2人。

テレホンサービスもやっており、0182-32-3380にかけると、いつでもホットな政治情報が聞ける。



●イラストレーター紹介

上山 工 (かみやま・たくみ)

昭和15年、青森県弘前市生まれ。桑沢デザイン研究所、デザイン会社を経て、フリーのイラストレーターとなる。『アサヒグラフ』に「悲情口」などを7年間連載。現在、地球・人間・未来をテーマに描いている。

かまくらとぴあ——雪国の未来

定価1200円 (送料実費)

昭和61年6月19日

第1刷発行

著 者

笹 山 登 生

発 行 者

落 合 英 秋

発 行 所

株式会社日本地域社会研究所

東京都千代田区富士見1-5-11

電話 03-264-1761(代表)

郵便番号 102 振替 東京5-41143

印 刷 所

株式会社和晃

©Tatsuo Sasayama 1986 Printed in Japan

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-89022-713-X C0036 ¥1200E

日本地域社会研究所の好評図書

全国学校図書館協議会選定図書
世界の新宿

21世紀のスーパーパーク

日本地域社会研究所編：毎日変わる街・刺激とエネルギーに満ちあふれた街・未来に向かって開かれた街・新宿／昭和の“丸の内”超高層ビル街を徹底解剖／新しい歴史が新宿からはじまる。

A4判二四二頁／定価一七〇〇円(元300)

日本図書館協会選定図書

コンベンション都市戦略

21世紀地域国際ビジネスの展開

UG都市設計・梅澤忠雄編著：コンベンションとは何か。コンベンション都市構想とは本質的にいかなるシナリオの都市経営戦略なのかをわかりやすく解説。

A5判二九八頁／定価二八〇〇円(元300)

千葉の時代

首都圏最後のフロンティアを拓く

日本地域社会研究所編：むかし湘南、いま房総！新世紀に向けて、眞の文化・産業都市のあり方を描く千葉大図鑑。

B5判二七八頁／定価一七〇〇円(元300)

人間と技術の調和ある街を創る

コミュニティ・エンジニアリング

兵頭宣昭編著：高度な技術とヒューマニズムによつて、心のやりの大きを得られる街をつくる。人間と技術との新しい関係づくりのために書かれた、話題の書／元250円(元300)

四六判上製三六八頁／定価一五〇〇円(元250)

いつも新しい最先端の情報・知識を送る地域・都市づくりの総合誌

田園都市

●既刊号案内(年4回発行)B5判／各号1500円(元250)

- 第1号=「われらの田園都市構想」を求めて／大都市の地方化と田園都市化
第2号=地方定住と日本人の仕事・暮らし／人間の顔をした80年代の集合住宅
第3号=日本に学ぶ／地域医療の建設／日本の地域問題研究者600人
第4号=地方としての東京／「まちづくりの時代」への挑戦
第5号=まちづくりの実践／田園都市建設のノウハウ
第6号=都市の挑戦／人間が都市を創る・都市を楽しむ
第7号=文化としての都市農業／株式会社田園都市経営論
第8号=地方の独創／第1回緑の都市賞発表！
第9号=コミュニティ・エンジニアリング／これがバルコの街づくり戦略だ
第10号=現代的「おくにじまん」の創造／技術の社会化・地域化に挑む
第11号=新・地域産業おこし／第2回緑の都市賞発表！
第12号=中小水力開発と地域振興／私の病院の地域医療
第13号=CATVと地域社会／21世紀都市を創るために
第14号=コミュニティ・エンジニアリングの実践展開
第15号=ロングライフ時代の理想コミュニティ／第3回緑の都市賞発表！
第16号=植物エンジニアリング／街・自転車・人間の調和
第17号=世界都市へ・播磨の実験／第4回緑の都市賞発表！
第18号=チバラキの時代／地域產品の大展開
第19号=静岡の挑戦／第5回緑の都市賞発表！
第20号=風と水と未来都市／地方・地域の国際化

